HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | 西フリジア語文法記述の問題点 |
| Author(s) | 清水, 誠 |
| Citation | 北海道大學文學部紀要, 44(3), 41-107 |
| Issue Date | 1996-03-29 |
| Doc URL | http://hdl.handle.net/2115/33664 |
| Type | bulletin (article) |
| File Information | 44(3)_PL41-107.pdf |

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学部紀要 44-3 (1996)

# 西フリジア語文法記述の問題点

清　水　　誠

Enkele opmerkingen over de beschrijving van de Westerlauwers Friese taalstructuur

(*The Annual Report on Cultural Science* 44-3 (No.87). The Faculty of Letters. Hokkaido University. Sapporo. Japan 1996. ISSN 0437-6668)

SHIMIZU Makoto

## I. はじめに

本稿は西フリジア語（Westerlauwersk Frysk；オランダ・フリースラント州，話者約40万人）の文法記述のさいに問題となる点を児玉仁士著『フリジア語文法――オランダのもうひとつの言語――』（大学書林　1992年 ix. 292 pp.）をもとに論じることを目的とする。

本稿のもとになっているのは次の論文である。

SHIMIZU Makoto. 1993. "Naar aanleiding van Hitoshi Kodama, *Fryske grammatika*". *Us Wurk—Tydskrift foar frisistyk*. 42. 103-114.

これは筆者が1993年9月から1年間，オランダのフローニンゲン大学フリジア語学科に滞在したさいに，現地のフリジア語研究者の要請を受けて執筆したものである。しかし，オランダ語で書かれているために，帰国後，日本語による解説を求める声があった。そこで，上記の論文を新たに日本語に改めることを思いついた。ところが，現地のフリジア語研究者向けに執筆した内容は，そのまま日本語にしただけでは理解しがたい点が多く出てくることが予想され，また，発表からすでに数年が経過しているために，たんなる

日本語訳は避けなければならなかった。そのため，上記の論文に大幅な解説を加え，帰国後の研究成果を織り込みながら内容的な充実をはかることにした。その結果，上記の著書の批判を行ないつつ，西フリジア語の構造にかんする興味深いトピックを選んで論じ，同言語の特徴を明らかにすることを主眼とする内容に変わった。分量的にも上記の論文の数倍に増えたため，今回，これを別の論文として発表することにしたものである。筆者は現在，西フリジア語の文法をまとめる仕事に従事しており，本稿はこの仕事の一環としての意味をもっている。

## II．児玉仁士著『フリジア語文法』の意義

日本語で書かれた言語学関係の著作がオランダでこれほど大きな注目を集めた例は，児玉仁士氏（獨協大学教授，英語学）の手による『フリジア語文法』を措いてほかにない。同書の刊行以来，すでに十指に余る紹介記事がオランダの各種新聞・雑誌に掲載された。フリジア語研究の国際化にたいするこの並々ならぬ功績によって，児玉氏は先頃，日本人として初めてフリスケ・アカデミー（Fryske Akademy）の会員に選ばれもした。

オランダとりわけフリースラントでのこのような熱烈な反響にたいして，日本の広義のゲルマニスティク界の反応は意外なまでに冷ややかである。この画期的な著作は，著者の祖国にあっては美しい所有物として何人かの好事家の書棚を静かに飾っているにすぎないような印象を受ける。筆者の知るかぎり，日本語による同書の書評はまだ出ていない。もっとも，これは未知の言語にかんする初めての文法書の刊行にさいして見られるこの国の通例のパターンとさして変わるところはない。

察するに，上述の事態は英語や標準ドイツ語の小さな兄弟たちの研究がかなり立ち遅れている日本のゲルマニスティク（ゲルマン語研究）の現状を端的に示しているようである。たとえば，過去にオランダとの密接な関係を育くんだ歴史のあることがよく知られているこの国では，オランダ語学を主専攻とすることができる高等教育機関が絶えてからすでに久しい。一方，「日本独文学会」（Japanische Gesellschaft für Germanistik）は2640名（1995

年5月12日の時点）の会員を擁し，ドイツ本国以外で世界最大の規模を誇る同種の学会として発展するまでになった。今日，日本では星の数ほどあるドイツ語教科書・自習書が出版され，20種類もの日本語とのドイツ語対訳辞書が入手可能である。一方，オランダ語については，第二次大戦以来，『フリジア語文法』の刊行時までに一冊の蘭和辞書も公にされることがなかった。独和辞典の巻末に添えられたドイツ語方言地図には，オランダ語が低地ドイツ語とごっちゃにされてドイツ語の方言としての烙印を押されている様子がうかがえる。日本の大部分のゲルマニストの関心は，とくに近年，おもに英語で開発された最新の言語理論を消化することに集中しているが，そのさい英語とドイツ語という聖域内に踏みとどまろうとし続けてきた。こうした傾向が日本のゲルマニスティクの発展にとって，かならずしもプラスの影響の方向にはたらくとはかぎらないことを懸念する向きは，ことさら顕著とはいいがたいようである。そして，それはとくに最近の生成文法に見られるように，さまざまな方言や珍しい言語の示す興味ある諸現象に積極的に言及しようとする理論言語学の動向に照らした場合，痛切に感じられてくる。Unsprachwissenschaft の克服と Sprachunwissenschaft の克服とに費やされる労力の一方的な不釣り合いが，この国のゲルマニスティクの特色をなしているかのようである。

このような状況にあって，児玉氏の手によるフリジア語文法は，日本のゲルマニスティクにおいても，国際的なスケールでのフリジア語研究においても，疑いなく重要な意義をもつ試みとして認められるべきものである。同書の執筆にさいして氏が直面したに相違ない幾多の困難は，だれもが想像することができよう。同書の「はしがき」の部分で，氏は英文で，“The Netherlands Organisation for Research NWO” によって設立され，1989年から3カ月にわたる氏のフローニンゲン大学およびフリスケ・アカデミーでの滞在を可能にした “The Foundation of Linguistic Research” に謝意を表している。さらに氏はフローニンゲン大学言語学科のデ・グラーフ博士（dr. T. de Graaf）と同僚のフリジア語学者諸氏の援助にも謝辞を捧げている。

オランダ本国ですでに好意的な言葉が十分に表明されていることにかんが

みて，同じく日本人としての立場から同書についての客観的な評価を試みる時期に来ているといえよう。

## III．フリジア語の歴史的背景

『フリジア語文法』の内容は次の3つの部分に分けられる：「フリジア人の言語・文学・文化とその歴史」（第1章と第2章，1-38ページ），「現代西フリジア語の文法の概要」（第3章から第13章まで，39-245ページ），「テキスト」（第14章，246-259ページ）。さらに，参考文献（260-262ページ）と西フリジア語－日本語の語彙集（263-292ページ）が付されている。

本書の冒頭の2章が西フリジア語に限らず，北フリジア語や東フリジア語への言及を交えて，広くフリジア語（群）一般の歴史と文化についてのくわしい記述に当てられているのは，同書が「『未知の言語』であるフリジア語を日本に紹介する」（iページ）「本邦初のフリジア語の解説書」（同左）としての役割を果たすようにとの意図からである。ときおり，原語にかわって英語による表記が散見される。例："Seventeen Privileges, 和訳なし（10ページ）"（西フ．Santjin Kêsten「17条の法令」），"Book of Rudolph, 和訳なし（同左）"（西フ．Rudolfsboek「ルドルフの書」）（以上いずれも古フリジア語の文献名），"Klei-Frisian「泥炭方言」（32ページ）"（西フ．Klaaifrysk, 筆者の訳語は「クラーイ方言」），"Wouden Frisian「森林方言」（同左）"（西フ．Wâldfrysk 筆者の訳語は「ヴォーデン方言」），"South West hook Frisian「南西鉤状方言」（同左）"（西フ．Súdwesthoeksk 筆者の訳語は「南西部方言」）。

この2章はよくまとまった概説といえるが，次のような誤解を招く記述を含んでいるのが惜しまれる。たとえば，すでに古くなった「アングロ・フリジアン」（17ページ）（エ．Anglo-Frisian）という用語を踏襲している。17ページと19ページには，「ドイツ語を除いた3つの言語〈筆者注：英語，フリジア語，オランダ語〉と低地ドイツ語は...『イングヴェオン語群』と総称されることもある」（17ページ），「『イングヴェオン語群』に属する，英語・フリジア語とオランダ語」（19ページ）と述べられているが，オランダ

語全体をそのまま「イングヴェオン語群」〈筆者注：オ．Ingweoons,「北海ゲルマン語」（オ．Noordzeegermaans）のこと〉とすることには問題がある。なぜなら，歴史的に見ると，オランダ語は「非イングヴェオン語群」に属する古低フランケン方言（オ．oudnederfrankische dialekten）と「イングヴェオン語群」に属する海岸部方言（オ．kustdialekten）の両者を含んでいるからである。「都市フリジア語」（西フ．Stedsk，オ．Stadfries）はその言語的性格をめぐるホットな論争を尻目に，「オランダ語訛りのフリジア語」（33，34ページ）として片づけられてしまった。

19ページ以下に英語と(西)フリジア語の密接な歴史的親縁関係の証拠として挙げられている12の特徴のなかで，次の7点は恣意的であり，意味をもたない。じじつ，次の7点のなかで英語と(西)フリジア語だけの共通点を示すものはひとつもなく，オランダ語やドイツ語との共通点を示すものばかりである。

（引用：）

| | 英語 | フリジア語 | オランダ語 | ドイツ語 |
|---|---|---|---|---|
| 1） | 〈sh〉[ʃ] | 〈sk〉[sk] | 〈sch〉[sx] | 〈sch〉[ʃ] |
| | shoe「靴」 | skoech | schoen | Schuh |
| | shot「銃声」 | skot | schot | Schuß |
| | shoulder「肩」 | skouder | schouder | Schulter |
| 3） | 〈f〉 | 〈f〉 | 〈f〉[f] | 〈v〉[f] |
| | 〈筆者注：オランダ語の〈v〉[f] の文字の発音は完全な無声音ではない〉 | | | |
| | folk「人々」 | folk | volk | Volk |
| | four「4」 | fjouwer | vier | vier |
| | cf. fat「脂肪」 | fet | vet | Fett |
| 7） | 〈th〉[θ] | 〈d〉 | 〈d〉 | 〈d〉 |
| | thing「もの」 | ding | ding | Ding |
| | thief「どろぼう」 | dief | dief | Dieb |
| 8） | 〈y〉[j] | 〈j〉[j] | 〈j〉 | 〈j〉 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| year「年」 | jier | jaar | Jahr |
| yacht「ヨット」 | jacht | jacht | Jacht |
| young「若い」 | jong | jong | jung |
| 9) 〈gh〉[～] | 〈ch〉[x] | 〈ch〉[x] | 〈ch〉[ç] |

〈筆者注：ドイツ語の〈ch〉の文字には[x]の発音もある〉

| | | | |
|---|---|---|---|
| right「正しい」 | rjocht | recht | recht |
| slight「わずかな」 | sljocht | slecht | schlecht |

〈筆者注：英語以外は意味がずれている〉

| | | | |
|---|---|---|---|
| 10) 〈d〉 | 〈～〉 | 〈d〉 | 〈d〉 |
| hand「手」 | hân | hand | Hand |
| land「土地」 | lân | land | Land |
| 11) 〈i〉[ai] | 〈ii〉[i:] | 〈ij〉[εĭ] | 〈ei〉[ai] |
| pipe「パイプ」 | piip | pijp | Pfeife |
| tide「時，潮」 | tiid | tijd | Zeit |

(以上 19-21 ページ)

西フリジア語の「指小辞」(25 ページ)(筆者の用語は「縮小形」，西フ．ferlytsingswurd/diminutyf，オ．verkleinwoord/diminutief) の存在は，本書での指摘に反して「オランダ語と同様に特異な側面」(25 ページ) とはいえない。あるいは，「指小辞」(同上) の乏しい北フリジア語との比較から述べられたものだろうか (Hofmann 1961 参照)。また，「フリジア語は古期においてすでに，〈主語＋動詞＋目的語〉の語順がある程度確立していたと言える」(26 ページ) とされ，「単文の場合：〈主語＋動詞＋目的語/補語〉が現代語の語順である」(27 ページ) と述べられているが，これは **19**) で述べるように，不適切である。

「フリジア人の文学」(10-16) は簡潔にして有益な文学史であるが，「巨匠の如くさん然と輝いている...フリジア人の偉大な国民詩人，ギスベート・ヤーピックス (Gysbert Japiks：1603-1666)」(11 ページ)〈筆者注：筆者の表記は「ギスベト・ヤーピクス」〉の詩集 *Fryske Rymlerye* を，たとえ Rymlerye が西フ．rymlerij，オ．rijmelarij，ド．Reimerei にあたるから

とはいえ，「フリジア語のヘボ詩」（12 ページ）と訳す手はないだろう。

## Ⅳ．音韻

### 1）母音

本書の第 2 部にあたる箇所（39-245 ページ）は文章語としての現代標準西フリジア語の構造の詳細な記述である。

音韻と正書法にかんして，同書はかなりユニークな立場をとっている（第 3 章 39-67 ページ）。母音については，たとえば，[aĭ]（laitsje「笑う」，44 ページ）と [a:ĭ]（aai「卵」，同左）は区別されているが，[o:ĭ]（moai「美しい」）と [oĭ]（muoike「叔母」）の対立は考慮外に置かれている。

moai [mo:ĭ]「美しい」（44 ページ），muoike [mwŏ:ĭkə]「叔母」（44 ページ）〈筆者注：[mwŏĭkə] が正しい。筆者の表記は [mwŏikə]〉

短母音 [a] は「前母音」（41 ページ）に分類されている。しかし，短母音 [a]（[ɑ] と表記することもある）は長母音 [a:] に比べてやや後寄りであり，「前母音」としての性格は認めがたい。

本書をつうじて誤植はかなり多いが，ある程度やむを得なかったとはいえ，はっきり誤植と思われる箇所を除いても，一連の奇妙な「自由変異」（オ．vrije varianten）に遭遇する。

1）〈au〉[ɔŭ]：flau [flɔŭ]「眩暈がする」（44 ページ）〈筆者注：筆者の表記は [flɔu]〉

〈ou〉[ɔw]：frou [frɔw]「妻」（65 ページ）〈筆者注：「女の人」が一般的な意味。筆者の表記は [frɔu]〉

〈ouw〉[ɔuw]：bouwe [bɔ́uwə]「建てる」（同上）〈筆者注：筆者の表記は [bɔ́uə]〉

〈ouw〉[ouw]：fjouwer [fjóuwər]「4」（同上）〈筆者注：筆者の表記は [fjɔ́uər]〉

2）〈ui〉[øĭ]：struie [strøĭə]「振り撒く」（同上）〈筆者注：筆者の表記は [strœyə]〉

〈ui〉[ɔĭ]：kruie [krɔĭə]「押し動かす」（同上）〈筆者注：筆者の

表記は［krœyə］〉

方言的な異形である〈a〉［ɔ:］（falle［fɔ́:lə］「落ちる」，62ページ）のような特殊な発音を明記していることは目を引くが（標準語では［fɔ́lə］），もしかすると，これがWaling Dykstra（人名）「ヴァーリング・ディクストラ」のカナ表記として「ヴォーリング」（71ページ），「ボーリング」（68ページ）という不適切な表記をしてしまった原因かもしれない。〈a〉の文字を［ɔ］と発音するのは，歯茎音（いわゆる'soldaten'の子音）の直前の短母音に限られるのである。その一方で，Jan（人名）を「ヨン」とせずに「ヤン」（194，223ページ）とし，同様にJonkmanを「ヨンクモン」とせずに「ヨンクマン」（71ページ）としているのは，ことさらオランダ語式の発音にならったためだろうか。

「綴り」（62ページ以下）の章には記載漏れがいくつかある：〈au〉［ɔŭ］，〈eau〉［jo:w］/［øə］（例：hy skreau「彼は書いた」），〈o〉［o:］，〈oai〉［o:j］/［wa:j］，〈u〉［y］/［y:］，〈ú〉［y:］（以上，本書の発音表記の方式にならって筆者が加えたもの。筆者の表記はそれぞれ〈au〉［ɔu］，〈eau〉［jo:u］/［øə］），〈o〉［o:u］（/o:w/），〈oai〉［o:i］（/o:j/）/［wa:i］（/wa:j/），〈u〉［y］/［y:］，〈ú〉［y:］）

**2）子音**

次に子音および半母音について検討する。

本書によれば，［j］は「軟口蓋音」（45ページ）であり，［x］は「［I］音の後では［ヒ］音に近い」（46ページ）という。また，子音字rの発音として，喉音のr（オ．keel-r）がふつうの発音と認められてしまっている。

（引用：）「［r］：（歯茎音・）巻き舌音・有声音；舌先を巻き舌状にして振動させるか，口蓋垂（喉ひこ）を強い息で振動させるかする」（47ページ）

上記の点はいずれも事実として正しくない。［j］の音は硬口蓋音（エ．palatal）であり，Tiersma（1985：24）で'velar'（軟口蓋音）に分類されているのは誤植である。［x］の音はドイツ語と違って［I］などの前舌母音

の後で「[ヒ] の音」に近くなることはなく，そもそも西フリジア語に [ç] の音は存在しない。子音字 r の発音は舌先のふるえ音が正式であり，「口蓋垂（喉ひこ）を強い息で振動させる」のはオランダ語の影響などによる好ましくない発音とされ，標準語の記述にはなじまない。

### 3）鼻音化

以下，個々の音韻規則について検討する。

西フリジア語では‘母音＋n’は摩擦音 [f]，[v]，[s]，[z]，[j]，[w] あるいは流音 [r]，[l] の直前で鼻母音になる。これを鼻音化（西フ．nasalearring，オ．nasalering）という（清水 1995 a：56-59 参照）。

ynfal [fⁿfɔl]「思いつき，侵入」　　freonlik [frø̃ə̃ⁿlək]「親切な」

この章（55 ページ以下）では，鼻音化を受けた母音は無声音の〈s〉[s] に加えて，有声音の〈z〉[z] の直前でも長音化することがあるという説明が欠けている。

finzenis [fé:ⁿzənIs]「刑務所」　　moarnsiten [mwá:ⁿzitən]「朝食」

### 4）語末音の無声化

西フリジア語にはオランダ語やドイツ語と同様に，音節末（いわゆる「語末」ド．Auslaut）で障害音（西フ．obstruint；閉鎖音と摩擦音）が無声化する「語末音の無声化」（西フ．einlûdferskerping，ド．Auslautverhärtung）の現象がある。ただし，西フリジア語でこれが一般化したのは 20 世紀になってからのことである（清水 1995 b：57 参照）。

同書によれば，西フリジア語の「語末音の無声化」は〈b〉，〈d〉，〈z〉でのみ起こる現象であるという（61 ページ）。〈z〉の例としては外来語の jazz [dzjɛs] だけが挙がっている。さらに，「中でも〈d〉の無声化は最も一般的である」（同上）と述べられている。

（引用：）「語末が〈b，d，z〉で終わる語は，無声化され [p，t，s] となる。これは，比較的最近の傾向で，中でも〈d〉の無声音化は最も一般的である」

rib [rIp]「肋骨」　krab [krap]「カニ」　bliid [bli:t]「嬉しい」
jild [jilt]〈筆者注：[jIlt] の誤植〉　jazz [dzjɛs]「ジャズ」

(以上 61 ページ)

上記の点はいずれも理解に苦しむ。まず，「中でも〈d〉の無声化は最も一般的である」というのは誤りであり，「語末音の無声化」は対象となる障害音（閉鎖音と摩擦音）の種類にかかわらず，規則的に起こる。

さらに大きな誤解と思われるのは，本書では「語末音の無声化」をたんに正書法が変わらない場合の発音上の交替と理解してしまっている点である。つまり，上掲の説明からわかるように，次の①と②のなかで閉鎖音についての①だけが「語末音の無声化」とみなされているのである。

① 閉鎖音

krab [krap]「カニ」—krabben [krábən]「同左（複数形）」
bliid [bli:t]「嬉しい」—blide [blí:də]「同左（変化形）」

② 摩擦音

rêch [rɛ:x]「背中」—rêgen [rɛ́:γən]「同左（複数形）」
brief [briəf]「手紙」—brieven [bríəvən]「同左（複数形）」
glês [glɛ:s]「コップ」—glêzen [glɛ́:zən]「同左（複数形）」

西フリジア語では②のように，摩擦音は有声音と無声音を正書法でつねに区別して表記する。これはオランダ語と共通し，ドイツ語とは異なる点である。しかし，これは正書法上の規則にすぎない。「語末音の無声化」を正書法と関連づけて定義するのは正しくない。正書法が有声音と無声音の表記を区別するか否かではなく，発音上，無声化が起こっているかどうかが問題なのである。上記の jazz [dzjɛs]「ジャズ」はごく最近の外来語であるために，通常の正書法の規則を破って表記されているのであり，これだけを〈z〉[s] の「語末音の無声化」の例とするのは不適切である。その結果，75 ページでは

dei—dagen「日」(「単数形—複数形」の順，以下同様)
god—goaden「神」　ko—kij「雌牛」

のような語幹の部分の交替を伴う例外的な複数形だけでなく，

Fries—Friezen「フリジア人」　glês—glêzen「コップ」
each—eagen「目」　mich—miggen「ハエ」
brief—brieven「手紙」　wiif—wiven「妻」

なども，意外なことに，「変則的な」(75ページ) 複数形をもつ語とみなされてしまっている。これがまったく規則的な音韻規則である「語末音の無声化」の有無に従った正書法の交替を示すまったく規則的な複数形をもつ語であることは，説明の余地がない。

**5)「割れ」**

西フリジア語ではアクセントを持ち，あいまい母音 [ə] で終わるくだり二重母音（西フ．delgeand　twalûd）が名詞の複数形・縮小形（西フ．ferlytsingswurd/diminutyf）のような語形変化や派生語・合成語のような語形成において，前半部の長めの母音の開口度が1段下がった（[oə]→[wa] では2段：[o]→[ɔ]→[o]）短母音を後半部とするいわゆる「のぼり二重母音」(西フ．opgeand twalûd) と交替することがある。これを「割れ」(西フ．brekking，オ．breking) という（清水 1995 a：65-79 参照)。本書では「ブレイキング」(52ページ以下) と訳されている。

[iə]→[jI] stien [stiən]「石」→ stiennen [stjÍnən]「同左（複数形)」
[Iə]→[jɛ] beam [bIəm]「木」→ beamke [bjɛ́mkə]「同左（縮小形)」
[uə]→[wo] goed [guət]「良い」→ guodlik [gwódlək]「善良な（派生語)」
[oə]→[wa] moarn [moən]「朝」→ moarnsiik [mwáⁿsi:k]「朝に弱い」

この現象の扱いにかんしては論理的な一貫性が欠けている。54ページには

（引用：）「強調する場合は，オランダ語の影響もあって，むしろブレイキングを受けない発音...が好まれる」(54ページ)

とあるのにたいして，55ページでは

（引用：）「強勢が置かれる時には，ブレイキングを伴った発音の方を用

いる」(55ページ)

のように相反する記述がなされている。

### 6）同化

次のような例は「前進同化：後進同化とは逆に，後続の音が先行の音に同化する場合」(57ページ)（筆者の用語は「順行同化」，西フ．progressive assimilaasje）であるという。

baas　wie [ba:zviə]（和訳なし，58ページ）〈筆者注：baas「ボス」，wie「...だった（wêze の過去形）」〉

liif by [li:vbɛĭ]（和訳なし，同上）〈筆者注：liif「生命」，by「..のもとで」〉

noch ien [nɔγiən]（和訳なし，同上）〈筆者注：noch「まだ」，ien「1つ」〉

しかし，これは「後進同化」（筆者の用語は「逆行同化」，西フ．regressive assimilaasje）の例である。

「前進同化」には次の例さえ含められてしまっている。

〈b〉[p]：slaab [sla:p]＋-ke → slabke [slápkə]「小さいあばら骨」(58ページ)

〈nk〉[ŋk]：gong [goŋ]＋gonkje [gɔ́ŋkjə]「細い通路」(同上)

後者の例は「同化」ではなく，[k] の挿入である（清水 1995 b：56 f. 参照)。

ちなみに，西フリジア語に順行同化を認めることには問題があり，むしろ音素配列論的な制約（オ．fonotaktische restrikties）ととらえたほうがいいように思われる。これについては Visser (1988 a)，清水 (1995 b：77 ff.) 参照。本書にはこの点についての言及はない。

### 7）*Frysk Wurdboek*（1984）の発音表記

この章に見られる誤りのいくつかは，明らかに J. W. Zantema (útj.). 1984. *Frysk Wurdboek 1. Frysk-Nederlânsk*（『西フリジア語—オランダ語辞

典』）の誤植に由来する。この辞典は目下のところ，西フリジア語の発音辞典としての役割を担い得る唯一のモダンなものだが，誤植が目立つ。筆者自身，西フリジア語を学びはじめた当初，なぜ ˈwenje [ve$^{n}$jə]「住む」（1172ページ）の語幹母音が広い [ɛ] でなくて狭い [e] なのか，また，grut [grøt]「大きい」の語頭の閉鎖音 [g] がどうして最上級では現われないのか（359ページ，grutst [grø(:)st] の [g] が有声摩擦音 [γ] に対応する表記で記されている）などと無駄な時間を費して思い悩んだ経験がある**〈注〉**。

この種の誤りに属するものとしては，次のような発音表記が挙げられる。

biology [biologí]「生物学」⇔ fysiology [fizio:lo:gí]「物理学」（49ページ；*Frysk Wurdboek* 280ページ参照）〈筆者注：[fiziologí]「生理学」が正しい〉

prinses [pre:$^{n}$sɛ́s]「王女」（同上；*Frysk Wurdboek* 782ページ参照）〈筆者注：[prI$^{n}$sɛ́s] が正しい〉

fjouwer [fjɔ́uwər]「4」（65ページ；*Frysk Wurdboek* 284ページ参照）〈筆者注：[fjɔ́uwər] が正しい。筆者の発音表記は [fjɔ́uər]〉

典型的なケースは半母音 [w] の説明（67ページ）である。そこでは語頭音（ド．Anlaut）で次のような〈w〉[v] と〈w〉[w] の奇妙な対立の記載が見られる。

antwurd [ɔ́ntvøt]「返事」⇔ wurd [wøt]「語」（67ページ）〈筆者注：[vøt] が正しい〉

wâld [vɔ:t]「森」⇔ wâld [wɔ:t]「力」（同上）〈筆者注：[vɔ:t] が正しい〉

注には「〈w〉を [w] と発音する語は極めて少ない」（同上）と記されている。しかし，語頭音で [v] と [w] の対立があるのは，「割れ」を起こした [wa] を含む次のような場合である。

wart [vat]「いぼ」⇔ hoart [wat]「（しばらくの）時間」

語中音（ド．Inlaut）で子音に後続する場合にも，本書では *Frysk Wurdboek* とまったく同じように次のような区別がなされている。

[w]：dwaan [dwa:n]「する」

⇔ [v]：kwea [kvIə]「悪い」，twa [tva:]「2」，swart [svat]「黒い」(67ページ)

じっさいには両者には発音上の区別はなく，いずれも [wa] (/w/) で足りる。*Frysk Wurdboek* では16ページの説明にあるように，[w] は [d]，[k]，[s]，[t] の直後で [v] として発音されることがあり，[w] と [v] の両方を記すべきところを紙面の制約などの理由から [v] とだけ記す方針をとっている。ところが，dwaan「する」では [dva:n] と印刷するべきところを誤って [dwa:n] と印刷してしまったのである。本書の誤りは，十分な言語調査を怠って同辞典の記述を無批判に踏襲したことに原因がある。

**8）短母音化**

この章でもっとも残念なのは，短母音化（西フ．ferkoarting，オ．verkorting）についての説明がない点であろう。

西フリジア語では別の音節やある種の子音が加わって，語が長くなったり音節後半部の構造が複雑になると，これを嫌ってアクセントをもつ母音が逆に短くなることがある。長母音が短くなるときには対応する短母音になり，これを短母音化という。それにたいして，二重母音について類似した現象を示すのが**5）**で述べた「割れ」である。

このように，短母音化は「割れ」とともに，オランダ語との対比において西フリジア語の重要な特徴である。現われる環境も名詞の複数形・縮小形といった語形変化や派生語・合成語といった語形成においてであり，「割れ」と共通している。

faam [fa:m]「女の子，女中」→ fammen [fámən]「同左（複数形）」

brêge [bré:γə]「橋」→ brechje [brɛ́xjə]「同左（縮小形）」

bliid [bli:t]「うれしい」→ blydskip [blítskIp]「喜び（派生語）」

hân [hɔ:n]「手」→ hantekening [hɔ́nte:kənIŋ]「署名（合成語）」

また，短母音化と「割れ」との関係の深さは，次例に示すように，両方の現象が同じ語彙に見られることがあるという事実からもうかがえる。

brief [briəf，bri:f]「手紙」—briefke [brjÍfkə，brífkə]「同左（複数

形)」

sliepe [slíəpə]「眠る」—hy {slepte [slɛ́ptə]/sliepte [sljÍptə]}「彼は眠った」

西フリジア語の音韻の重要な特徴である短母音化が本書で考慮外に置かれているのは残念なことである。

以上，音韻と正書法にかんしては清水（1995 a，b）に筆者の考えによる記述を示しておいた。

## Ⅴ．形態と統語

### Ⅴ－1．動詞の形態について

#### 9）「en＋命令形」構文

この種の欠陥は形態と統語にかんする章についても指摘できる。たとえば，フリジア語群に広く見られるいわゆる「en（オ．en，ド．und)＋命令形」構文にはまったく言及がない。

De polysje soe by him komme *en nim* syn papieren *mei*.「警察が書類を押収するために彼のところに来るかもしれない」('nim...mei' は meinimme「押収する，もっていく」の命令形）(Dyk/Hoekstra 1987：25)

It is gjin dwaan gelyk *en pleagje* dy âld man sa.「そのおじいさんをそんなに責めるのはかわいそうだ」(pleagje は pleagje「責める，苦しめる」の命令形）(ib. 26)

Jelle tocht der net oan *en knip* syn hier *ôf*.「イェレは髪を切ることを考えなかった」('knip...ôf' は ôfknippe「髪を切る，散髪する」の命令形）(ib. 27)

It idee *en lis* de Lauwerssee *droech* is net alhiel nij.「ラウエルス海を干拓しようという考えはまったく新しいというわけではない」('lis... droech' は droechlizze「干拓する」の命令形）(ib. 26)

上記の例に見られるように，「en＋命令形」構文は機能的に不定詞句に相当する。機能的な面を重んじてこれを「命令形不定詞」と呼ぶことにすれ

ば，西フリジア語にはオランダ語やドイツ語の不定詞に相当する語形が次の3種類あることになる（「動名詞」については**30**）参照)。例：nimme「取る」

不定詞（第1不定詞）：nimme「取る」

動名詞（第2不定詞）：nimmen「同上」

命令形不定詞（第3不定詞）：nim「同上」

「第1不定詞」/「第2不定詞」/「第3不定詞」というのは北フリジア語文法での用語である。北フリジア語にも上記のような機能的に3種類の不定詞に相当する語形がある（清水 1992：114 ff. 参照）

フリジア語群に広く見られ，統語論的に興味深いトピックのひとつにかぞえられる「en＋命令形」構文が本書で考慮外に置かれているのは残念である。

**10）弱変化動詞と強変化動詞；je-動詞**

弱変化動詞の区分にかんして，なぜ本書では「je-動詞」が省かれてしまっているのか理解に苦しむ。驚くべきことに，「je-動詞」は「強変化動詞」のリスト（149-154ページ）に収められているのである。本書の記述によれば，次の動詞はすべて「強変化」動詞であるという。

laitsje—lake—lake「笑う」(150ページ)（'不定詞—過去形—過去分詞' の順，以下同様）

reitsje—rekke—rekke「届く」(151ページ)

weitsje—wekke—wekke「起こす」(同上)

kôkje—kôke—kôke「料理する」(153ページ)

tôgje—tôge—tôge「運ぶ」(同上)

loegje—loege—loege「積み重ねる」(同上)

ploegje—ploege/ploeide—ploege/ploeid「耕す」(同上)

spylje—spile—spile「遊ぶ」(同上)

上記の動詞は過去形・過去分詞を形成するゲルマン語の弱変化動詞に共通の歯茎音の接尾辞（西フ．-d/-t）を欠いている。しかし，これは弱変化動

詞に属する西フリジア語の「je-動詞」の特徴であって，母音交替（ド．Ablaut）を示していないことからもわかるように，これをもって強変化に分類することはできない（Meijering 1980 参照）。

過去形・過去分詞を形成するゲルマン語共通の歯茎音の接尾辞を欠く弱変化動詞の形態は，ノルウェー語ニューノシュク（nynorsk）やフェーロー語（føroyskt）にも見られる。しかも，西フリジア語，ノルウェー語ニューノシュクともに多数の動詞を含む代表的な弱変化動詞のグループを形成している（Werner 1993 参照）。過去形・過去分詞を歯茎音の接尾辞を用いて形成する弱変化動詞は，たしかに歴史的に見ればゲルマン語特有の発達といえるが（とくに過去形について。過去分詞については，ラ．ama-t-us 参照），現代のゲルマン諸語を類型論的に眺めた場合にはかならずしも妥当するとはいえないことに注意が必要である。

「je-動詞」（例：studearje「大学で学ぶ，研究する」）はまた，オランダ語の -eren（例：studeren「同左」）やドイツ語の -ieren（例：studieren「同左」）で終わる動詞に対応し，外来語を取り入れるときに用いられる弱変化動詞の生産的なパターンであって，現代西フリジア語の体系から見ても「不規則動詞」とすることはできない。一般にある言語における生産的なパターンを不規則とすることはできないからである。「不規則動詞」とすることができるのは，前述の

laitsje—lake—lake「笑う」　reitsje—rekke—rekke「届く」

のように語幹部分の交替を伴う語に限られる（ただし，これは歴史的に母音交替ではない）。

近年，「je-動詞」はオランダ語の干渉を受けて衰退しつつあるといわれるが，これは口語における傾向であり，標準語の記述を目的とする本書の内容にはそぐわない。じっさい，この点にかんするオランダ語からの干渉についての言及は本書には見られない。

さらに，「強変化」であるのは次の動詞でも同じということらしい。

skowe—skode—skood「押しやる」（154 ページ）

stowe—stode—stood「突進する」（同上）

これは明らかに誤解である。ただし，stowe については，

stowe—stau—stowen

という強変化のパターンもあるが，これについては同書に記載がない。

このように，「強変化」と「弱変化」という概念についていかなる定義が意図されているのか理解に苦しむ。

一方，問題なく強変化動詞と認められる動詞については，弱変化動詞との混同が見られる。西フリジア語ではオランダ語や発音上，英語と共通して，弱変化動詞の過去形・過去分詞をつくる歯茎音 -d/-t の区別が直前の子音の有声・無声によって決定される。それについては本書でも次のような記述がある。

(引用：一部要約)

［クラス－1］telle「告げる」〈筆者注：「数える」が正しい〉

語幹：tel-　　telle—telde—teld

［クラス－2］stappe「歩む」

語幹：stap-　　stappe—stapte—stapt

＊［クラス－1］の動詞は語幹が有声音で終わり，過去形には -de がつく。〈筆者注：過去分詞には -d がつく〉

［クラス－2］の動詞は語幹が無声音で終わり，過去形には -te がつく。〈筆者注：過去分詞には -t がつく〉　　(以上 138-139 ページ)

ところが，139 ページでは，

drinke—dronk—dronken「飲む」

skriuwe—skreau—skreaun「書く」

のような典型的な強変化動詞が，奇妙なことに，上掲の典型的な弱変化動詞の区分に対応するように，語幹子音が有声音か無声音かによって分けられているのである。

(引用：一部要約)

［クラス－1］drinke「飲む」(語幹が無声音で終わる)

語幹：drink-　　drinke—dronk—dronken

［クラス－2］skriuwe「書く」(語幹が有声音で終わる)

語幹：skriuw-　　skriuwe—skreau—skreaun

＊「〈クラス－1〉と〈クラス－2〉の区別は，弱変化動詞の場合と同じルールに基づく」（以上139ページ）

これはドイツ語のtrinken「飲む」とschreiben「書く」を次のように「区分」し，

［クラス－1］trinken「飲む」（語幹が無声音で終わる）

語幹：trink-　　trinken—trank—getrunken

［クラス－2］schreiben「書く」（語幹が有声音で終わる）

語幹：schreib-　　schreiben—schrieb—geschrieben

オランダ語のdrinken「飲む」とschrijven「書く」を次のように「区分」することに等しい。

［クラス－1］drinken「飲む」（語幹が無声音で終わる）

語幹：drink-　　drinken—dronk—gedronken

［クラス－2］schrijven「書く」（語幹が有声音で終わる）

語幹：schrijf-　　schrijven—scheef—geschreven

このような「区分」を採用している古今東西の文法書を筆者は寡聞にして知らない。動詞の変化にかんするこのユニークな扱いは，本書だけに見られる大きな特徴といえる。

### Ｖ－２．英語と西フリジア語のあいだ

英語学者である本書の著者が西フリジア語の構造をとくに英語との比較から説明しようとしたのは，理にかなった手順だったといえよう。たしかに，歴史的に見ると，フリジア語は‘the closest relative of English’と形容されるように，英語ともっとも親縁関係が深い。しかし，現代語を類型論的に比較した場合にはその限りではない。英語はいわゆる西ゲルマン語的な性格の多くを失って独自の特徴を示すように発達し，西フリジア語はオランダ語の強い影響下にあって，オランダ語的な性格を強く帯びるようになった。古フリジア語（西フ．Aldfrysk）は別として，現代西フリジア語の構造はオランダ語やドイツ語との共通点が顕著であり，英語からの類推にはむしろ注意

が必要である。本書の場合，残念なことに，英語からの干渉がマイナスにはたらくことが多かったようである。いくつか例を挙げる。

**11）再帰動詞と再帰的表現**

Ik waskje mysels.「私は自分で洗濯をする」（101 ページ）

Wy waskje ússels.「私たちは自分たちで洗濯をする」（同上）

mysels/ússels は「他人の助けを借りずに」という意味で解釈されている。これは誤りであり，上記の文はそれぞれ「私は自分の体を洗う」/「私たちは自分の体を洗う」という再帰的な解釈を受ける。西フリジア語の mysels/ússels は英語の myself/ourselves と違って，このような場合に副詞的に用いられることはない。上記の訳文の意味は次のように sels（オ．zelf，ド．selbst）を用いて表現する。

Ik waskje sels.「私は自分で洗濯をする」

Wy waskje sels.「私たちは自分たちで洗濯をする」

一方，101 ページには「次の例と比較せよ」として，-sels を除いた語形を含む文が挙がっており，再帰的な解釈が示されている。これは正しい解釈である。

Ik waskje my.「私は体を洗う」（101 ページ）

Wy waskje ússels.「私たちは体を洗う」（同上）

前掲の mysels/ússels を用いた例は，-sels を付加することによって「他人の体でなく，自分の体を（洗う）」というように，他との対比によって再帰的な意味が強調されるにすぎない。オランダ語の ‘me zelf’/‘ons zelf’ やドイツ語の ‘{mich/mir} selbst’/‘uns selbst’ を参照。

歴史的に見た場合の北海ゲルマン語の特徴を残すものとして，西フリジア語には今日でも再帰代名詞がない。次の例の him「彼（目的格）」は再帰的な意味にも非再帰的な意味にもなる。

Hy$_i$ wasket him$_{i/j}$.「彼は自分の体を洗う」/「彼は他の男の人の体を洗う」

したがって，次の文の意味のあいまいさはアクセントの有無などで解消され

ることになる。

Hy$_i$ wasket him$_i$ sels.「彼は自分自身の体を洗う」(sels にとくに強いアクセントを置かない。正書法上，himsels とつづることが多い)

Hy$_i$ wasket him$_j$ sels [séls].「彼は自分で他人の男の人の体を洗う」(him の後に短い休止を置き，sels にとくに強いアクセントを置く)

再帰代名詞は他の人称代名詞との対立において，典型的には単文内の主語と同じ名詞句を指すための形式であるから，3人称に限られるのがしぜんである。1・2人称は発話の場面において唯一の対象を指すものと決まっており，単文内の主語と同じ対象を指すか違う対象を指すかを示す理由がない。西フリジア語の mysels/ússels は -sels の有無によって再帰的か否かの区別を示すことはないのである (**22**) 参照)。

**12) 完了形**

Ferline wike is har juwiel djoer ferkocht.「先週彼女の宝石が高い値で売られた」(158 ページ)

De âldman is fan 'e moarn hinnegien.「その老人は今朝亡くなった」(同上)

上記の2つの文はともに「現在時制」(157 ページ) が「『過去の結果』が現在も継続している場合」(158 ページ) を示す例として挙がっている。たしかに，is (オ．is，ド．ist) は wêze (オ．zijn，ド．sein) の現在形ではある。しかし，'is...ferkocht'「売られた」(オ．is...verkocht，ド．ist...verkauft worden)/'is...hinnegien'「亡くなった」(オ．is...overleden，ド．ist...verstorben) はそれぞれ 'ferkocht wurde'「売られる (不定詞)」/hinnegean「亡くなる (不定詞)」の現在完了形ととらえるべきである。意味的にも「『過去の結果』が現在も継続している」(158 ページ) のではなく，たんなる過去のできごとを示しているにすぎない。これは現代英語の be が完了形の助動詞として用いられることがなくなっていることに引きずられたためだろうか。一方，次の文は「現在完了時制」の例として挙げられてしまっている。

De snie is hast al wei.「雪はほとんど消えている」(160ページ)
この場合にこそ，'is...wei'「消えている」(オ．is...weg，ド．ist...weg) の is は wêze の現在形であり，「現在完了時制」(同上) ではあり得ない。

完了の助動詞 hawwe (オ．hebben，ド．haben) と wêze (オ．zijn，ド．sein) の使い分けについては，次のように述べられている。

(引用：)「現在完了時制：過去分詞が他動詞の場合は〈hawwe＋過去分詞〉で，自動詞の場合は，〈wêze＋過去分詞〉で表現する」(159ページ)

言うまでもなく，自動詞のすべてが〈wêze＋過去分詞〉で完了形をつくるわけではなく，原則として場所の移動や状態の変化を示す動詞 (正確には動詞の用法) に限られる。

stoarn wêze (← stjerre)「死んだ (完了不定詞)」
⇔ songen hawwe (← sjonge)「歌った (完了不定詞)」

この点は，詳細は相違するものの，オランダ語やドイツ語でも同様であり，英語だけが異なっている。

オ．zijn gestorven (← sterven)「死んだ (完了不定詞)」
⇔ hebben gezongen (← zingen)「歌った (完了不定詞)」
ド．gestorben sein (← sterben)「同上」
⇔ gesungen haben (← singen)「同上」

また，'〈hawwe＋過去分詞〉/〈wêze＋過去分詞〉' という語順は西フリジア語としては本来，許されない。したがって，'〈過去分詞＋hawwe〉/〈過去分詞＋wêze〉' とすれば誤解がなくなる。完了不定詞において過去分詞に完了の助動詞が先行するのはオランダ語の干渉によるものであり，標準西フリジア語としては好ましくないとされる。また，従属文で動詞群の語順が「定形＋不定形」となるオランダ語と異なり，西フリジア語では「不定形＋定形」となるのも同様である。

完了形の意味については次のような例文の解釈が見られる。

Ik haw tsien jier yn Japan wenne.「私は日本に10年住んでいる」(190ページ)

Hja hawwe trije jier yn Dokkum wenne.「彼らはドックムに3年住ん

でいる」(200 ページ)

Wy hawwe tsien jier yn Grins wenne.「私たちはフローニンゲンに 10 年住んでいる」(230 ページ)

Wy hawwe der [hjir] tsien jier wenne.「私たちはそこ [ここ] に 10 年住んでいる」(231 ページ)

Syn beppe hat der allinnich wenne.「彼の祖母はそこに独りで住んでいる」(231 ページ)

Hy hat hjir studearre sûnt er yn' e stêd kaam.「彼は町に来てから，ここで研究をしている」(210 ページ)

上記の文はいずれも現在まで継続している状態を示すものとして和訳されている。しかし，これは誤りであり，たんに過去のできごとや状態を示しているにすぎない。したがって，和訳としては「住んでいた/住んだ」,「研究していた/研究した」としなければならない。西フリジア語の現在完了形は，英語の現在完了形とは異なって，現実世界での過去のできごとや状態を表わす手段であり，この点でオランダ語やドイツ語と共通している。過去形は物語や回想など，話者の主観的な世界にかかわる場合に用いられることが多い。

**13) 話法の助動詞**

「sille...＋過去分詞＋hawwe」の構文は，いわゆる「未来完了時制」(161 ページ) として「未来のある時点までの『行為・状態』を表現する」(同上) と述べられている。しかし，次例のように，この形式は過去の状態に言及することもある。この点もオランダ語やドイツ語と共通しており，英語 (shall) だけが異なっている。

Wy hawwe ús fan de taal dy't de earste minsken sprieken eins gjin foarstelling meitsje. Moai wis *sille* yn it earstoan de gebertens, de maneuvels in grutte rol *spile ha*.「私たちは人間がはじめて話した言語についてじっさいのところ何も想像することができない。ただ，最初のころは身振り手振りが大きな役割を果たしていただろうということは推

測できる」(Boersma/Van der Woude 1981[2]：6変更)

西フリジア語のsilleはオランダ語のzullenやドイツ語のwerden (wird) と同様に，推量の意味を基本とする話法の助動詞とみなしたほうがいい。

meieには「..してもよい，..できる」(166ページ) と並んで「好きだ」という意味がある。

Ik *mei* graach koeke.「私は料理するのが好きだ」(Zantema 1984：604)

また，次の文のように「..なければならない」という意味になることさえある。

Do *meist* dy wat skamje. (オ. Je moet je schamen)「君は少し恥を知りたまえ」(ib. 604)

このように，meieが「英語のmay，canに当たる」(166ページ) とみなすことには問題がある。また，次の文は正しく解釈されていない。

Piter mei net Ingelsk prate.「ピッテルは英語を話すことができない」(166ページ)

このmei (← meie) は「..できる」という意味ではなく，上記の文は「ピテルは英語を話してはならない」という禁止を表わす。「..できる」という意味には能力を表わす場合，kinneを用いることが多く，meieは状態や事情などから見て望ましいことや，可能性 (「..かもしれない」) の意味が強い (ド. können，mögen参照)。この可能性の意味もmeieの語義として記載するべきである。

ちなみに，前掲の文では否定詞net (オ. niet，ド. nicht) が用いられているが ('..net Ingelsk prate')，これは「英語はだめだが他の言葉はいい」という対比の意味を表わす場合の表現である。そのような対比が意図されていない場合には，一般に否定冠詞gjin (オ. geen，ド. kein) を否定される名詞の直前に置いて表現する。

Piter mei gjin Ingelsk prate.

オ. Pieter mag geen Engels spreken.

ド．Peter darf kein Englisch sprechen.

これもオランダ語とドイツ語に共通し，英語だけが異なる点である。

**14）受動態**

（引用：）「受動態の基本形：〈wurde［wêze］＋過去分詞〉：wurde は現在・過去・未来の受動態に，wêze は完了の受動態に用いられる。カッコ内の wurden は随意的に省略される」（168 ページ）

（引用：）

現在完了時制：

It brief is (...) skreaun wurden.「その手紙は...（すでに）書かれている」〈筆者注：原文に（wurden）のカッコがないのは誤植と思われる。訳文は「その手紙は...書かれた」がふさわしい〉

過去完了時制：

It brief wie (...) skreaun (wurden).「その手紙は...（すでに）書かれていた」

未来完了時制：

It brief sil (...) skreaun (wurden) wêze.「その手紙は...（その時までには）書かれているだろう」

条件法完了時制：

It brief soe (...) skreaun (wurden) wêze.「その手紙は...書かれているだろうに」（以上，169-170 ページ）

西フリジア語ではオランダ語と同様に，受動態の完了形で wurden（wurde の過去分詞）をつけないのが標準語としての原則である。これは worden をつけるドイツ語とは異なる点である。

現在完了形：

オ．De brief is (...) geschreven.〈筆者注：和訳省略，以下同様〉

ド．Der Brief ist (...) geschrieben worden.

過去完了形：

オ．De brief was (...) geschreven.

ド．Der Brief war (...) geschrieben worden.

いわゆる「未来完了形」：

オ．De brief zal (...) zijn geschreven.

ド．Der Brief wird (...) geschrieben worden sein.

いわゆる「条件法完了形」：

オ．De brief zou (...) zijn geschreven.

ド．Der Brief würde (...) geschrieben worden sein.

上掲の説明には「wurden は随意的に省略される」とあるが，これはヴォーデン方言（Wâldfrysk）だけに見られる方言的な異形であり，西フリジア語の標準語を対象とする本書にはそぐわない。この誤解はあるいは Tiersma（1985：76-77）の次の説明をもとにしているためかと思われる。

（引用：）

(3) *Present perfect passive*: formed by the present tense of the verb *wêze* followed by the past participle, then optionally *wurden*.

(4) *Past perfect passive*: the preterite of *wêze* followed by the past participle and optionally followed by *wurden*.

(6) *Future perfect passive*: the conjugated form of *sille*, followed by the past participle of the verb, optionally *wurden*, and then *wêze*.

(8) *Perfect conditional passive*: composed of the preterite of *sille*, followed by the past participle of the verb, optionally *wurden* and then *wêze*.

（以上，Tiersma 1985：76-77）

しかし，同書の 77 ページに次のような説明があることに注意するべきだった。

（引用：）NOTE: The word *wurden*, when in parentheses in the above chart, is apparently used in eastern Friesland and left out elsewhere. (ib. 77)

上述のように，西フリジア語ではオランダ語と同様に，受動態の完了形で wurden（wurde の過去分詞）をつけないのが標準語としての原則である。

したがって，西フリジア語ではオランダ語と同様に，受動態の完了形（「...された」）と状態受動（「(すでに)...されている」）が形式上あいまいである。

上掲の用例

現在完了時制：

It brief is (...) skreaun (wurden).「その手紙は...（すでに）書かれている」(169ページ，wurdenにカッコをつけてある)

にかんする訳文（「その手紙は...（すでに）書かれている」）は状態受動との混同を示しているように思われる。あるいは，英語の現在完了形からの干渉がはたらいて，過去の事実を表わす西フリジア語の完了形の意味（「その手紙は...（すでに）書かれた」）を誤って解釈している可能性がある。

次に，受動態の条件については下記のように述べられている。

（引用：）「受動態への転換が可能な文型は，通例，目的語を有する文である」(171ページ)

西フリジア語の受動態は「目的語を有する文」，すなわち，他動詞文に典型的なのではない。自動詞文でも動作主が含まれていれば受動態が可能である。西フリジア語の受動態の可否は意味論的な条件に依存するところが大きく，目的語の主語への昇格ではなく，動作主を焦点からはずすこと（エ. agent defocusing）がそのおもな機能といえる。これは英語を除くゲルマン語に広く共通する点である。じっさい，171ページには次のような自動詞の受動態の例も挙がっている。

Der wurdt net wer oer dy saak praat.「そのことはもう論じられないだろう」(同上)

Der wurdt thús op ús wachte.「(彼らは）私たちを家で待っている」(同上)

この2つの文では，対応する能動態の文の目的語が主語に昇格しておらず，主語を欠いている。しかし，praat（← prate「論じる」），wachte（← wachtsje「待つ」）が意味的に行為者を前提とする動詞であるために，目的語の有無にかかわらず，受動態が可能なのである。

英語からの干渉が事実の判断を惑わせたようである。

語彙の意味にかんしては次の記述が挙げられる。

(引用：) hjitte「...と呼ばれる」だけは受動的な意味を持つ珍しい語である」(168 ページ)

この指摘は正しくない。hjitte「...という名前である，...と称する」が受動的な意味をもっていないことは，対応する語形であるオランダ語の heten やドイツ語の heißen との比較からも明らかである。英語の 'be named', 'be called' とは何の関係もない。

**15) 形容詞の用法**

(引用：)「フリジア語には，同一の語が形容詞にも副詞にも用いられる語が極めて多く，これは，オランダ語やドイツ語などにも比較的よくみられる特徴の 1 つである」(112 ページ)

(引用：)「フリジア語では，副詞の大部分が，形容詞と同じ語形をしている」(184 ページ)

Hja kin moai sjonge.「彼女は歌がうまい」〈副詞〉(同上)

Us lân is moai.「私たちの国は美しい」〈形容詞〉(同上)

正確に言えば，上記の二つの文の moai は，伝統文法での扱いとは異なって，どちらも形容詞である。両者の相違は上掲の解説で述べられているような「品詞」の違いではなく，形容詞という品詞の「用法」の違いに基づく。形容詞 moai には次のような「用法」の区別がある。

Hja kin *moai* sjonge.「彼女は歌がうまい」—副詞用法（西フ．adferbiaal)

Us lân is *moai*.「私たちの国は美しい」—叙述用法（西フ．predikatyf)

in *moai* lân「美しい国」—限定用法（西フ．attributyf)

これはオランダ語やドイツ語と共通するが，副詞が品詞として語形的に区別される英語とは異なる点である。

エ．beautiful「美しい」(形容詞)⇔ beautifully「美しく」(副詞)

西フリジア語ではオランダ語やドイツ語と同様に，副詞とは場所（例：

hjir「ここ」)，時間（例：hjoed「今日」)，程度（例：sa「そのように，それほど」)，論理関係（例：dus「したがって」)，話者の態度（例：ommers「やはり」）などを示す無変化の雑多な種類の語を含む品詞を指す。

この点に関連して，巻末の「フリジア語彙」(263-292ページ）にはいわゆる「副詞，(副)」か「形容詞，(形)」かの区別が恣意的である場合が多い。次の語はすべて形容詞である。

iepen（形）「開いている；率直な」(274ページ)

⇔ticht（形）（副）「きつい［く]，固く，ぴったりと」(288ページ)

koart（形）「短い」(276ページ)

⇔lang（形）（副）「長い［く]」(277ページ)

leech（形）「低い；空いた」(同上)

⇔heech（形）（副）「高い［く]」(273ページ)

noflik（形）「楽しい；素敵な」(280ページ)

⇔dúklik〈筆者注：dúdlikの誤植〉（形）（副）「明白な［に]」(268ページ)

また，以下の語は不当にも副詞としてだけ記載されている。これもまた形容詞であり，副詞用法だけでなく，叙述用法も可能である。筆者の訳語としては限定用法の意味だけを記すことにする。

bepaald（副）「ことによると，きっと，かなり」(265ページ)〈筆者注：「特定の」という意味の形容詞〉

betreklik（副）「比較的に」(同上)〈筆者注：「かなりの」という意味の形容詞〉

danich（副）「すっかり」(266ページ)〈筆者注：「相当の」という意味の形容詞〉

eigentlik（副）「厳密に（言えば)」(同上)〈筆者注：「本来の」という意味の形容詞，および「いったい」という意味の話法の副詞（ド．Modalwort)〉

faak（副）「しばしば」(同上)〈筆者注：「しばしば起こる，たびたびの」という意味の形容詞，および「もしかすると」という意味の話法の

副詞〉

flot（副）「流暢に，巧く，ちゃんと」（270ページ）〈筆者注：「流暢な，巧みな，ちゃんとした」という意味の形容詞〉

fluch（副）「急いで」（同上）〈筆者注：「速い」という意味の形容詞〉

handich（副）「急いで」（273ページ）〈筆者注：「すばやい，便利な」という意味の形容詞〉

jierliks（副）「毎年」（275ページ）〈筆者注：「毎年の」という意味の形容詞〉

lyk（副）「同じ程度に，同じように」（278ページ）〈筆者注：「同じ，同様の」という意味の形容詞〉

lûdroft(ich)（副）「騒々しく」（同上）〈筆者注：「騒々しい」という意味の形容詞〉

lustich（副）「喜んで」（同上）〈筆者注：「喜んだ，楽しい」という意味の形容詞〉

meast（副）「殆ど」（279ページ）〈筆者注：「最も多くの，大部分の」という意味の形容詞〉

neier（副）「後で」（280ページ）〈筆者注：「より近い，よりくわしい」という意味の形容詞〉

ôfgryslik（副）「恐らく，とても」（281ページ）〈筆者注：「恐ろしい」という意味の形容詞〉

presys（副）「正確に，丁度」（283ページ）〈筆者注：「正確な」という意味の形容詞〉

ridlik（副）「かなり，適度に」（284ページ）〈筆者注：「正当な，かなりの」という意味の形容詞〉

tafallich（副）「偶然に」（288ページ）〈筆者注：「偶然の」という意味の形容詞〉

wakker（副）「特に」（290ページ）〈筆者注：「特別な，相当の」という意味の形容詞〉

wykliks（副）「毎週」（291ページ）〈筆者注：「毎週の」という意味の

形容詞〉

**16)「代名詞の der」**

Ik haw in pinne en ik skriuw der in brief mei.「私はペンを持っていて，それで手紙を書いている」(196 ページ)

Yn 1950 krige er der de Gysbert Japix-priis foar.「彼はこのために1950 年にギスベート・ヤーピックス賞を受けた」(同上)

上記の文をはじめとする 196-197 ページの例文は，「代名詞の der（アクセントをもつ場合は dêr)」と前置詞の残留を伴っている（西フ．der... mei，オ．er...mee，ド．damit；西フ．der...foar，オ．daar...voor，ド．dafür)。これについては次のように説明されている。

(引用：)「〈der-/dêr-＋前置詞〉の特別用法：

複合前置詞が，ある種の条件の下で，いわば『分割』され，その間に他の要素が介在する用法」(195 ページ)

しかしながら，西フリジア語では上記の例文の場合，der/dêr と前置詞を「分割」しないほうが「特別」なのであり，好ましくないとされる。一般に西フリジア語では，前置詞句が「代名詞の der」を含む場合，その前置詞句が補足成分（西フ．komplemint）として働いているときには前置詞の残留が起こるのがふつうである。これはオランダ語やドイツ語の方言にも広く見られ（標準ドイツ語では不可)，この意味でも「特別用法」とはいえない。英語では therefore，thereupon，hereby，herewith など一部の語に副詞として残るのみで生産性を失っており，前置詞の残留を伴うことはない。

**17) 語彙**

語彙にかんする干渉は次のとおり。

trou「真の」(65 ページ)，「本当の」(120 ページ)〈筆者注：「忠実な」が正しい。エ．true〉

gymnasium「体育館」(73，272 ページ)〈筆者注：「ギムナジウム（中等教育機関)」が正しい。エ．gymnastics との類推か〉

telle「告げる」(138ページ)〈筆者注:「数える」が正しい。エ. tell〉

moal「料理」(171, 279ページ)〈筆者注:「小麦粉」が正しい。エ. meal〉

bank「土手」(217ページ)〈筆者注:「ベンチ」が正しい。エ. bank〉

Frysk folksliet「フリジアの民謡」(255ページ, 'Frysk bloed, tsjoch op!' 「フリジア人の血よ, 沸き上がれ」で始まる19世紀に活躍したE. ホルベツマ (Eeltsje Halbertsma 1797-1858) の有名な詩にメロディーをつけたもの。フリジア人の民族意識を高めるために「フリジア人の国家, 民族の歌」として用いられることが多い)〈筆者注:「フリジア人の国歌, 民族の歌」が正しい。エ. folk song, ド. Volkslied〉

studearje「勉強する, 研究する」(287ページ)〈筆者注:「大学で勉強する, 研究する」が正しい。エ. study〉

## V－3. 言語記述の方法論

### 18) 伝統文法

本書で援用されている言語記述モデルは伝統文法である。このこと自体についてとくに異論はない。重要なのは, どのような理論を取るのであれ, それによって当該の言語構造の解明がよりよく行なわれることである。本書の場合, 全体として特定の言語理論に肩入れしない中立的な論述がなされていることは, とくに著者の特別な意図に基づくものではないようである。ときおり, 本書に関心を抱くようなレベルの日本の読者には不要と思われる説明が目につく。

その一例は名詞の章の冒頭の部分 (68ページ以下) である。2ページに及ぶ名詞という品詞の「1. 種類」と「2. 機能」をめぐる解説と用例は, 英語やドイツ語をはじめとするヨーロッパの他の言語と変わるところはない。これはとくに西フリジア語の構造の把握に寄与するとは言えず, 本書の内容にはそぐわない。

(引用:一部要約)

1. 名詞の種類

(1) 普通名詞：hûs「家」，bist「動物」
(2) 集合名詞：famylje「家族」，adel「貴族」
(3) 固有名詞：Amsterdam「アムステルダム」，Frysk「フリジア語」
(4) 物質名詞：goud「金」，sulver「銀」
(5) 抽象名詞：leafde「愛」，idealisme「理想主義」

2．名詞の機能

(1) 文の主語となる
(2) 自動詞の主格補語となる
(3) 他動詞の目的語となる
(4) 目的格補語となる
(5) 形容詞の目的語となる
(6) 前置詞の目的語となる
(7) 呼称・同格語として　(以上 68-70 ページ)

**19）語順；補文標識とその「活用」**

「基本文型」(218 ページ以下) を扱った部分では，伝統文法の枠組みと英語からの干渉が二重に不適切にはたらいている。すでにIIIで述べたように，本書では誤って 'S+V+O/C' が現代西フリジア語の基本語順とみなされてしまっているが (「主語＋動詞＋目的語/補語が現代語の語順であるが...」27 ページ)，そのうえ，ここでは英語の有名な 5 文型をそのまま西フリジア語に当てはめようとしている。

(引用：)「文の基本要素は，通例の平叙文では，各文型に見られる順序で配列される」(218 ページ)

(引用：)

(1) S+V: Hja rôpen.「彼らは叫んだ」
(2) S+V+C: In hûn is in trou dier.「犬は忠実な動物だ」
(3) S+V+O: Hy sloech syn soan.「彼は息子を殴った」
(4) S+V+O+O: Hja joegen de bern appels.「彼らは子供たちにリン

ゴをあげた」

(5) S+V+O+C: Hy fûn de kaai ûnder de matte lizzen.「彼はマットの下に鍵があることに気がついた」　(以上 218-219 ページ)

さらに，本書によれば単一文とは「〈S+V〉を基本とする文」(216 ページ) であり，単一文の定動詞は

(引用：)「単一の動詞のみの場合で，通常の平叙文では，主語の直後に置かれ」(222 ページ)，「助動詞を 1 つ伴う動詞句で,...助動詞は主語の直後に置かれる」(同左)

という。「〈om...te 不定詞〉構文内の語の配列」(232 ページ) についても，

(引用：)「om+(　) te不定詞+-nは，本来，基底文として，(主語)+(分離)動詞+目的語/補語+副詞句を持つ」(同上)

のように分析されてしまっている。

西フリジア語は「定動詞第 2 位」(ド．Verbzweit, V-2) と「枠構造」(Satzklammer) を備えるという，英語を除くいわゆる西ゲルマン語の特徴を保持しており，主語が平叙文の文頭に立つ英語の語順と根本的に相容れないことは，オランダ語やドイツ語の文構造に照らせば明らかである。西フリジア語では，主文の定動詞の位置は主語の位置とは無関係に第 2 位と決まっている。それは補文標識 (エ．complementizer：西フ．dat/'t) と同じ位置であり，両者の現われかたは相補分布の関係にある。すなわち，補文標識を欠く主文では定動詞は第 2 位を占めることができるが，補文標識がその位置をふさいでいる従属文 (従属接続詞・関係詞・間接疑問文の疑問詞を含む文) や不定詞句では，定動詞は文末にとどまっていなければならない。

Hy　*wie*$_i$ juster siik　$____i$.「彼は昨日病気だった」

Juster　*wie*$_i$ er siik　$____i$.「昨日，彼は病気だった」

Ik wit　*dat* er juster siik　*wie*.「私は彼が昨日病気だったことを知っている」

Ik wit net　*oft* er juster siik　*wie*.「私は彼が昨日病気だったかどうか知らない」

Ik wit net　*wa't* juster siik　*wie*.「私はだれが昨日病気だったの

か知らない」

Dat is de man *dy't* juster siik *wie*.「それが昨日病気だった男の人です」

*Om't* er juster siik *wie*, koe er net komme.「昨日病気だったので，彼は来ることができなかった」

Hy frege my *om* meigean *te kinnen*.「彼は私にいっしょに行ってくれないかと頼んできた」

だからこそ Van Haeringen (1939) 以来，西フリジア語では主語が 2 人称親称単数の場合に，補文標識は定動詞と同様に「活用」(西フ．fleksje：'-st') するという考えかたが可能になるのである (De Haan 1994 参照)。

Ik wit {datsto/datste/datst/*dat do} juster siik wiest.「私は君が昨日病気だったということを知っている」(-o/-e ← do「君（主格)」)

上記の文において datsto/datste/datst は dat に 2 人称親称単数の変化語尾 '-st' がついているので文法的になるが，'dat do' では変化語尾 '-st' がついていないので非文法的になる。datst は主語人称代名詞 do を欠いた形（エ．'pro'-drop）である。

同様に，だからこそ次のような並列接続詞としての dat の用法が議論を呼ぶことになるのである (De Haan 1983 参照)。

Ik tink {*datsto/*datste/*datst/dat do} wiest juster siik.「私は君が昨日病気だったと思う」(dat：並列接続詞－変化語尾 '-st' なし)

Ik tink net {datsto/datste/datst/*dat do} juster siik wiest.「私は君が昨日病気だったとは思わない」(dat：従属接続詞－変化語尾 '-st' あり)

本書ではこの 2 点が考慮されていない。

以上のことがらは記述のレベルでの問題であり，特定の理論に肩入れしなくても認めざるを得ない事実である。また，このような語順にたいする考えかたは，近年の良心的なドイツ語の初級文法の教科書では例外なく前提とされているところでもある。英語の語順を基本として西フリジア語の文構造を説明しようとする 214 ページ以下の記載には，言語記述の上で根本的な誤解

があり，外国語教育の立場からも好ましくない。

補文標識ということに関連して，次の点に注意を喚起しておく。上記の従属文を導く要素は

従属接続詞 om't「..だから」(← om＋dat)

間接疑問文の疑問詞 oft「..かどうか（ということ）」(← of＋dat)

wa't「だれが..か（ということ）」(← wa＋dat)

関係代名詞 dy't「(上記の文では）両性単数主格」(← dy＋dat)

のように，かならず dat（オ．dat，ド．daß）の連接形（西フ．klitik）である 't を伴っている。つまり，従属文（＝補文）であることを表示するのはこの 't（← dat）であり，これが補文標識である。't（← dat）と結びつく om（オ．om，ド．um），of（オ．of，ド．ob），wa（オ．wie，ド．wer），dy（オ．die，ド．der/die）はどのような従属文かを特定化しているにすぎず，'t（← dat）なしで従属文を導くことはできない。

従属接続詞 dat「..ということ」はそのような特定化する要素がつかず，dat が 't という連接形にならずに単独で現われている語形である。

Ik wit *dat* er juster siik wie.「私は彼が昨日病気だったことを知っている」

また，om't「..だから」のように前置詞と同形の要素に 't がついたものでは，omdat [omdót] のように dat の部分にアクセントを置けば，dat がそのまま現われる。

{*Om't/Omdat*} er juster siik *wie*, koe er net komme.「昨日病気だったので，彼は来ることができなかった」

さらに，wa't「だれが...か」では 'wa oft（← of＋dat)' のように，of（オ．of，ド．ob，エ．if）が連接形 't のホストになれば wa と oft が分かれることも許される。

Ik wit net {*wa't/wa oft*} juster siik *wie*.「私はだれが昨日病気だったのか知らない」

本書にはこの補文標識 't（← dat）についての説明が何もない。「補文標識」という用語を持ちださなくても，上述のような事実には言及することが

望ましい。オランダ語やドイツ語の方言の多くに共通し，英語の歴史的統語論にも関係の深いこの西フリジア語の重要な特徴が本書で看過されているのは残念なことである。

## V－4．その他のトピック

### 20）人称代名詞

87ページには次のような人称代名詞の一覧表が載っている。

| | | 主格 | 連接辞・弱形 | 目的格 | 弱形 |
|---|---|---|---|---|---|
| 単数 | 1人称 | ik「私は」 | 'k | my [mɛi] | [mi] |
| | 2人称 | do「君は」〈親称〉 | | dy [dɛi] | [di] |
| | | jo「あなたは」〈敬称〉 | je | jo | |
| | 3人称 | hy「彼は」 | er | him | [əm] |
| | | hja「彼女は」 | se | har | [ər] |
| | | it「それは」 | 't | it | |
| 複数 | 1人称 | wy [vɛi]「私たちは」 | we [və, vi] | ûs | |
| | 2人称 | jimme「君［あなた］たちは」 | jim | jimme | |
| | 3人称 | sy, hja, it「彼［彼女・それ］らは」 | se | harren | [har] |

（以上87ページ）

上記の一覧表では「弱形」と「連接辞」（筆者の用語は「連接形」，西フ．klitik）の区別が不明確である（Visser 1988 b 参照）。

「弱形」とはたんにアクセントをもたない語形であり（例：se「彼女（主格）」），「連接辞」とは現われる位置が統語論的に補文標識と主文第2位の定動詞の直後のみに制限されているものをいう（例：er「彼（主格）」）。説明としては次のように述べられている。

（引用：）「hy〈筆者注：「彼（主格）」，オ．hij 参照〉は弱勢の時（例えば，動詞や連結詞の後），通例，er [ər]〈筆者注：「彼（主格）」，ド．er 参照〉によって代用される」（90ページ）

Hja is hjoed thûs, sei er.「彼女は今日家にいる，と彼は言った」(同上)

Ik wit net wêr't er wennet.「彼はどこに住んでいるのか私は知らない」(同上)

しかし，hy「彼」はたんに「弱勢の時」ならばいつでも er「同左」で代用できるわけではない。「例えば，動詞や連結詞の後」というのは，「例えば」でなく，これがすべての場合である。じっさい，次の例のように dat が従属接続詞でない場合には，弱勢であっても er は用いることができない(**19**) の 2 人称親称単数 do/-o/-e の場合も同様)。

Ik tink dat {*hy/er*} jûn ek komt「私は彼が今晩も来ると思う」(dat：従属接続詞)

Ik tink dat {*hy/*er*} komt jûn ek.「同上」(dat：並列接続詞)

同じく 87 ページの人称代名詞の一覧表には，3 人称単数主格の hja と並ぶ sy「彼女」が抜けている。これはオランダ語の zij からの借用であるが，今日では西フリジア語として定着しているといえる。じじつ，「連接辞・弱形」の部分には同じくオランダ語からの借用である se が記されている。

同じく上記の一覧表には，3 人称単数 it「それ」が主格だけでなく，目的格でも弱形が 't であるという記載がない。

上記の一覧表に 3 人称「複数」主格として it「それら」が記されているのは，誤植ではないようである。じじつ，次の例文がそれに相当するものとして挙がっているからである。

It binne aaien.「それらは卵です」(87 ページ)

この it は主語ではなく，定動詞 binne が複数形なのは，主語である aaien「卵（複数形)」と一致しているためである。it は「単数形」なのであり，「複数形」ではあり得ない。次のドイツ語の文における es を 3 人称代名詞「複数形」として記述している近年の良心的なドイツ語文法書を筆者は寡聞にして知らない。

ド．Es sind Eier.「同上」

平叙文の主文の文頭に立つ文成分が主語であるという英語からの干渉を受けた本書の誤った解釈は，ここでもマイナスにはたらいている。じじつ，西

フリジア語やオランダ語，ドイツ語では文頭に「卵」を立てて，次のように言うこともできる。

西フ．Aaien binne it.「同上」

オ．　Eieren zijn het.「同上」

ド．　Eier sind es.「同上」

**21）不定代名詞**

（引用：）「men：『人』を漠然と指す。また，ik を用いると，表現があまりにも直接的になり過ぎるので，それを和らげるためにこの語を用いる。諺などにしばしば好まれる表現でもある」（99 ページ）

この説明は不十分であり，次のような表現が許されない理由がはっきりしない。

*Oant likernôch 1100 iet *men* yn Fryslân wakker ientoanich.「1100 年頃までフリースラントの人々の食事はかなり単調だった」（ULI'S，B 3：11 変更）

**Men* seit dat er al fuortgien is, mar ik bin der net wis fan.「彼はもう行ってしまったそうだが，私はよく知らない」

西フリジア語の不定代名詞 men はオランダ語の men やドイツ語の man と異なって，「（話者を含んで一般的に）人は」という意味なのであり，この点を明記する必要がある。上記の例文が不自然なのはこのためである。

**22）人称代名詞の再帰的用法**

すでに **11）** で述べたように，西フリジア語ではオランダ語の zich やドイツ語の sich と違って再帰代名詞としての特別な語形がない。したがって，下記の用例は「再帰代名詞」の用例ではなく，「人称代名詞の再帰的用法」の用例としたほうがふさわしい。これは 87 ページの人称代名詞の一覧表に記してもいいところである。

（引用：）再帰代名詞：

Ik skamje my.「私は恥をかく」

Do skammest dy.「君は恥をかく」

Jo skamje jo.「あなたは恥をかく」

Hy/Hja skammet him/har.「彼［彼女］は恥をかく」

Wy skamje ús.「私たちは恥をかく」

Jimme skamje jimme.「君たち［あなたがた］は恥をかく」

Hja skamje harren.「彼らは恥をかく」　　（以上 100-101 ページ）

重要な問題は，上記の例文に 3 人称中性 it「それ」の部分が抜けていることである。たしかに，これは人を主語にとる 'jin skamje'「恥を知る」（オ．zich schamen，ド．sich schämen）という例ではしかたないことではある。しかし，87 ページの人称代名詞の一覧表でも it（主格）の目的格は it とあるにすぎない。これでは it の目的格は非再帰的用法では it であり，再帰的用法では him（または himsels）である（dit「これ」，dat「あれ，それ」などでも同様）というように異なることがわからない。

[It waar]$_i$ hold {*him*$_i$/**it*$_i$} goed.「天気はもちこたえた」（再帰的用法：him ; hold ← hâlde「保つ」）

{It$_i$/Dit$_i$/Dat$_i$} seit {**itsels*$_i$/*himsels*$_i$}「{それ/これ/あれ（それ）}」は当然だ」（再帰的用法：himsels ; seit ← sizze「言う」）

it の目的格が it（非再帰的用法）と him/himsels（再帰的用法）に分かれる事実はぜひとも記述する必要がある。

同様に，**21)** で述べた不定代名詞 men「（話者を含んで一般的に）人は」の目的格は immen（非再帰的用法）と jin/jinsels（再帰的用法）に分かれることも記述しなければならない。

*Men*$_i$ moat {*jin*$_i$/**immen*$_i$} waskje.「自分の体を洗わなければならない」（immen を用いると「だれかの体を洗わなければならない」という意味になる）

*Men*$_i$ moat {*jin*$_i$/**immen*$_i$} skamje.「恥を知るべきだ」

さらに，3 人称複数目的格の se は再帰的用法では用いることができず，この場合は harren に限られることも明記する必要がある。87 ページの一覧表ではそれが示されていない。

Hja$_i$ waskje {*harren*$_i$/**se*$_i$}.「彼らは自分の体を洗う」(Hoekstra 1994：52)（se を用いると「彼らは他の人たちの体を洗う」という意味になる）

Hja$_i$ skammen {*harren*$_i$/**se*$_i$}.「彼らは恥ずかしく思った」(ib. 52)

西フリジア語にオランダ語の zich やドイツ語の sich のような再帰代名詞専用の特別な語形がないということは，西フリジア語に再帰的な表現がないということを意味するわけではない。それはたんに形態的に実現されないということを意味するにすぎない。上記の事実はそれが一部で形態的にも区別されること示している。

西フリジア語ではオランダ語と同様に，他の名詞を修飾する属格を除いて，ドイツ語のような語形変化による名詞句の形態的な格の区別がなくなっている。しかし，これは西フリジア語やオランダ語に統語的な格の区別がないことを意味するものではない。同様に，西フリジア語の再帰的表現は形態的にはドイツ語やオランダ語と実現の程度が異なるものの，統語的には両言語と同様に記述する必要がある（**11**）参照)。

**23)「wat (...) foar (in)＋名詞」構文**

Wat foar (in) fisk is dit?「これはどんな種類の魚ですか」(104 ページ)

この文にたいして，同じ意味の次の文は「不可」(同上）であるという。

*Wat is dit foar (in) fisk?（同上）

しかし，これはまったく問題なく正しい文である。対応するオランダ語とドイツ語の文も同様に文法的である（英語には対応する構文がない)。

オ．Wat voor (een) vis is dit?「同上」
　　Wat is dit voor (een) vis?「同上」

ド．Was für ein Fisch ist das?「同上」
　　Was ist das für ein Fisch?「同上」

「wat (...) foar (in)＋名詞」構文において wat だけが分離して文頭に移動することで問題が生じるのは，名詞が主語であり，とくに行為者（ド．Agens）を表わす場合に多い。この点は西フリジア語，オランダ語，ドイツ

語に共通している。

西フ．*Wat foar famkes* sille jûn dûnsje?「どんな女の子たちが今晩，踊るのだろう」

*Wat sille jûn *foar famkes dûnsje?*「同上」

オ．*Wat voor meisjes* zullen vanavond dansen?「同上」

* *Wat* zullen vanavond *voor meisjes* dansen?「同上」

ド．*Was für Mädchen* werden heute abend tanzen?「同上」

* *Was* werden heute abend *für Mädchen* tanzen?「同上」

ただし，「虚辞（西フ．ekspletyf）の der」を備える西フリジア語および「虚辞（オ．expletief）の er」を備えるオランダ語では，それぞれ‘オ．er’/‘西フ．der’を主語の位置に置くことで文法的にできる場合がある。ドイツ語（es）では不可。

西フ．Wat sille *der* jûn foar famkes dûnsje?「同上」

オ．Wat zullen *er* vanavond voor meisjes dansen?「同上」

ド．*Was werden *es* heute abend für Mädchen tanzen?「同上」

**24）関係詞**

（引用：）「関係副詞として，基本的な語は英語の where に対応する dêr't [dɛ(:)t] だけである。先行詞が〈場所〉に関する語に限る」（110ページ）

しかし，時を表わす doe't も同様に「基本的な」関係副詞にかぞえられる。

Mannich klaaidoarp is ûntstien yn 'e tiid *doe't* der noch gjin seediken wiene.「クラーイ地方の村の多くは海の堤防がなかった時代にできた」（ULI'S，C 11：2変更）

**25）比較**

Hy is (de) grutste jonge.「彼が最も体の大きい青年だ」（123ページ）

定冠詞 de はこの場合，省略できない。また，jonge には「青年」ではな

く，「少年」の意味がふさわしい（オ．jongen，ド．Junge）。

ちなみに，次の指摘は正しい。

（引用：）

Hy is it grutst(e).「同上」

grutst.　＊grutst の用法は今は廃用。（以上 122 ページ）

Tiersma（1985：53）には次の用例が挙がっている。

se is (de) âldste　'she is (the) oldest'

se is it âldst(e)　'she is the oldest'

se is âldst　'she is oldest'　（以上 Tiersma 1985：53）

しかし，最後の用例（'se is âldst'）は古風で文語的であり（'ferâldere of literêre konstruksjes', Dykstra 1985: 81），今日では一般的ではない。

次の点にも注意が必要である。

（引用：）「比較級には -noch〈筆者注：-nôch の誤植〉（...過ぎる）を付けることによって意味が強化される。...

moaiernôch「文句のつけようのないほどよい」

hegernôch「十分な高さである」

fierdernôch「遠過ぎる」　（以上 122 ページ）

-nôch は語形的にオ．genoeg，ド．genug にあたり，上記 3 語の -er の語尾はかつての格語尾に由来するものであって，形容詞の比較級の語尾ではない。

**26）定冠詞の弱形（'e/'t）**

「定冠詞の縮約形」（134 ページ，'e [ə]← de「両性および複数」/'t [t]← it「中性単数」）〈筆者注：筆者の用語は「弱形」〉については次のように述べられている。

（引用：）

(1) 「場所を示す前置詞（fan，yn，oan，om，op，ût，など）の後では，通例，縮約形が用いられる。（134 ページ）

(4) 使用頻度のあまり高くない前置詞（例えば，fan，foar，neist，

oan, troch, など）の後では，縮約形は随意的に用いられる。

（以上 135 ページ）

(1)と(4)では前置詞 fan, oan が重複しており，矛盾している。(1)では 'fan 't skip'「船から」(134 ページ)，(4)では 'fan it kantoar'「その事務所から」(135 ページ）が挙がっているが，両者のあいだで it と 't の使用頻度の差はないのであり，(1)と(4)に分ける理由はない。また，(4)の fan, foar, neist, oan, troch は「使用頻度のあまり高くない前置詞」とは思われない。さらに，(1)の用例 'fan 'e skoalle'「学校の」の fan は「場所を示す前置詞」とはいえない。

西フリジア語の定冠詞の「弱形」（本書の用語は「縮約形」）はドイツ語の zum (← zu dem)/zur (← zu der), am (← an dem)/ans (← an das) などを想起させるが，その条件は次のように規定される。

定冠詞の弱形は 'e (← de) と 't (← it) のあいだで使用条件が異なる。't は純粋に発音上の弱形であり，とくに強調されない場合に広く用いられるのにたいして，'e には特別な使用条件があり，n/m あるいは他の閉鎖音で終わる 1 音節の前置詞の直後以外では現われにくい。したがって，

fan「..から，..の」，yn「..の中に」，neist「..の横に」，oan「..の表面・側面に（接して)」，om「..のまわりに」，op「..の上に（接して)」，ût「..から」，

などでは問題ないが，

foar「..の前に，..のために」，troch「..を通って」，ûnder「..の下に」などではむずかしくなる。このように，定冠詞の弱形の使用の可否は 'e と 't の場合でそれぞれ区別して記述する必要がある。そして，その基準は場所を示すか時を示すかといった意味的なものではなく，前置詞の使用頻度とも関係がない。とりわけ 'e の使用基準は音韻論的な条件に規定されたものであり，さらにつけ加えるならば，ドイツ語でもそうであるように，イディオムには弱形が義務的に用いられるものがあることから，語彙的に固定したものも対象になる。本書の 134-135 ページで「『場所』に関する名詞」，「『時』に関する語」で用いられる弱形はこのイディオムの場合である。

yn 'e hûs「家の中に」〈筆者注：hûs「家」は中性名詞であり，両性の 'e を用いるのは「自宅」の意味の場合である〉(134 ページ)

fan 'e wike「今週」，fan 't maitiid「この春に」〈筆者注：maitiid「春」は両性名詞であり，両性の季節名に中性の 't を用いるのは 'fan 't＋季節名'「今年の...に」という場合の例外的な特徴である〉(135 ページ)

**27) 過去分詞**

(引用：)「形態的に言えば，...過去分詞には，-d，-t/-(e)n のいずれかの語尾を付ける」(155 ページ)

しかし，すでに **10)** で述べたように，-je で終わる弱変化動詞の過去分詞では上記のいずれの語尾もつかない。

makke (← meistje「作る」)

studearre (← studearje「大学で学ぶ，研究する」)

また，

(引用：)「過去分詞は『...された』の意味に一応訳してみる」(同上)

ことにすると，自動詞の過去分詞は受動的な意味がないので訳せなくなってしまう。

さらに，

(引用：)「副詞としての用法：もっぱら現在分詞の用法」(同上)

とあるが，副詞用法が「もっぱら現在分詞の用法」でないことは明らかである。用例としては，次の文のような現在分詞の用例しか挙がっていない。

Piter wurdt huverjend wekker.「ピッテルは震えながら目が覚めた」(155 ページ)〈筆者注：huverjend ← huverje「震える」〉

しかし，過去分詞の用例も容易に挙げることができる。

De fleanmasjine, om trije oere *oankommen*, stie noch te wachtsjen.「その飛行機は 3 時に到着して，まだ待機していた」(Tiersma 1985：135)

*Berne* yn 1873 te Loaiïngea by Snits, folget er (＝Sipke Huismans) de H.B.S. en leart er ta dûmny oan de Frije Universiteit te Amsterdam.

「1873年にスニツ（オ．Sneek　スネーク）近郊のルワイエンゲア（オ．Loënga　ローエンガ）に生まれ，彼（＝シプケ・ハイスマンス）はギムナジウムに進み，アムステルダム自由大学で牧師になる勉強をした」(Stienstra 1982：87変更)

**28）分離動詞と「名詞抱合」**

(引用：)「分離動詞を構成する接頭辞として，主なものを挙げると，以下の通りである。...

by-, del-, foar-, yn-, mei-, nei-, oan-, oer-, ôf-, om-, op-, ta-, troch-, tsjin-, werom-, など。

これらの接頭辞を頻度の順に挙げると，

gean「行く」, komme「来る」, sette「置く」, hâlde「保つ」, nimme「取る」, sjen「見る」, jaan「与える」, meitsje「作る」が比較的多い。

中でもgeanの頻度が圧倒的に多い」　(以上175ページ)

以下，175ページの本文には上記の動詞に次ぐものとして，bringe「持ってくる」, leare「学ぶ」, lizze「横になる，横たえる」など20の動詞が挙がっている。しかし，これは動詞と分離動詞の前綴り（上記の引用では「接頭辞」）の結合の頻度ではなく，動詞そのものの頻度を表わしているにすぎず，分離動詞の形成についての説明とは無関係である。動詞自体の頻度と，動詞と前綴りの結合の頻度とのあいだに特筆すべき有意な差異が認められるとは思われない。オランダ語やドイツ語にも西フリジア語と同様に分離動詞は存在するが，両言語ともにそのような差異が認められるとは思われない。

分離動詞の前綴りと前置詞は同一の語形である場合があるが，次の用例では両者の混同が見られる。

(引用：)「接頭辞が文中で分離する場合...

(3)　命令文で：...

Pas der goed op.「それには十分注意しなさい」

(以上175-176ページ)

上記の文は自動詞passe「注意する」に‘der...op’「それに」という前置詞

句目的語がついたものであり（ド．auf et$^{A}$ passen: Paß gut darauf!），oppasse という分離動詞の用例（ド．[auf et$^{A}$] aufpassen: Paß gut darauf auf!）ではない。

分離動詞に関連して，西フリジア語の動詞のタイプとして特徴的なものに，いわゆる「名詞抱合」（西フ．nomenynkorporaasje）がある。これは動詞の目的語にあたる名詞が前綴りのようになって，動詞とともに一語を形成するものである。ただし，前綴りのようになる名詞の部分は非分離である。したがって，「名詞抱合」による動詞は非分離動詞に似ているが，アクセントは前綴りの名詞の部分にあり，この点では分離動詞と共通している。例：

kofjedrinke「コーヒーを飲む」（← kofje「コーヒー」+drinke「飲む」）

teedrinke「お茶を飲む」（← tee「お茶」+drinke「飲む」）

krantelêze「新聞を読む」（← krante「新聞」+lêze「読む」）

reedride「スケートをする」（← reed「スケート」+ride「(乗り物で)行く」

skûtsjesile「ヨットを走らせる」（← skûtsje「ヨット」+sile「帆走する」）

hanwaskje「手を洗う」（← hân「手」+waskje「洗う」）

aaiskje「(野鳥の）卵探しをする」（← aai「卵」+sykje「探す」）

例として kofjedrinke「コーヒーを飲む」の変化は次のようになる。

Hy wol *kofjedrinke*.「彼はコーヒーを飲みたがっている」（不定詞）

Hy gie te *kofjedrinken*.「彼はコーヒーを飲みに行った」（動名詞）

Hy *kofjedrinkt*.「彼はコーヒーを飲む」（現在形）

Hy *kofjedronk*.「彼はコーヒーを飲んだ」（過去形）

Hy hat *kofjedronken*.「同上」（現在完了形）

ドイツ語やオランダ語にも同様の語は散見される。例：

西フ．stofsûge—stofsûgt—stofsûgde—stofsûgd「電気掃除機を使って掃除する」

オ．　stofzuigen—stofzuigt—stofzuigde—gestofzuigd「同上」

ド．　staubsaugen—(staubsaugt　稀)—(staubsaugte　稀)—staubgesaugt「同上」

オランダ語の stofzuigen は過去分詞で gestofzuigd のように語頭に ge-(西フリジア語には ge- がない）がつく点でも，「名詞抱合」による複合動詞が分離動詞とは異なることを示している。一方，ドイツ語の staubsaugen は定形（現在形・過去形）では非分離ながら，その使用は稀であり，じっさいには不定形（不定詞・過去分詞）での使用にほぼ限られる。さらに，過去分詞で staubgesaugt のように ge- が staub- と -saugt のあいだに置かれる点では，分離動詞としての性格を示している。

西フリジア語の「名詞抱合」は定形でも不定形でも広く用いられ，日常多用される語彙を多く含み，オランダ語よりもその数がはるかに多い。オランダ語では，上記の kofjedrinke「コーヒーを飲む」，teedrinke「お茶を飲む」，kranteleze「新聞を読む」，reedride「スケートをする」，skûtsjesile「ヨットを走らせる」，hanwaskje「手を洗う」，aaiskyje「(野鳥の）卵探しをする」のどれをとっても，対応する動詞は「名詞抱合」を伴うことはない。

西フリジア語の「名詞抱合」は興味深いテーマであり，フリスケ・アカデミーの S. ディク氏（drs. Siebren Dyk）による博士論文も予定されている(1995 年 11 月現在)。また，同氏によれば「名詞抱合」は北フリジア語にも見られる（Dyk 1992 参照)。

このような興味深い現象が本書で扱われていないのは残念である。

**29）非人称動詞**

(引用：)「非人称動詞...

『感覚』に関する動詞：目的語がその動詞の主体になる語に多く見られる。...

〈具体例〉

It begruttet my om him wekker te meitsjen.「彼を起こして申し訳あ

りません」〈筆者注：「彼を起こすのはかわいそうだ」が適切〉

It smakket my goed.「とてもおいしい」

It die my deugd om jo brief te krijen.「あなたの手紙を受けとって嬉しい」〈筆者注：「...嬉しく思った」が適切〉

It die my nij dat jo der neat fan witte.「君はその事について何も知っていないのかと思った」〈筆者注：「あなたがそのことについて何も知らないのが私には意外だった」が適切〉　(以上 177-178 ページ)

上記の 4 つの文はいずれも「非人称動詞」の「具体例」として挙がっている。しかし，上記の it はすべて特定の要素を指しており，「非人称代名詞」ではなく，したがって，定動詞が非人称動詞でないことは明らかである。「非人称動詞」の定義としては次のように述べられている。

(引用：)「人称代名詞の 3 人称単数 it には，It is myn boek.「それは私の本です」のように，ある特定の『もの』を指定する用法もあるが，この他に，特定のものを指定しない非人称代名詞としての用法もある。このような代名詞を主語とする動詞を非人称動詞という」(177 ページ)

この定義は正しく，上記の用例の解釈が誤りといえる。

**30)「te＋動名詞」と前置詞**

(引用：)

「前置詞の支配語

A．通例，名詞・代名詞・不定詞・副詞を支配する。...

(3)　不定詞の場合：〈te＋動詞 -en〉の形式をとる。

It begun te reinen.「雨が降りだした」　(以上 194-195 ページ)

すでに **9**) で述べたように，西フリジア語には動詞に動名詞（西フ．gerundium/doelfoarm,「不定詞＋n」）という形態がある。これは機能的に不定詞の一種で，本書の 179-183 ページにあるように，上記の用例のような te とともに用いられる場合のほかに単独で用いられる場合がある。単独での用法には次のものがある。

①　アスペクトまたは動作態様（ド．Aktionsarten)：

stean bliuwe「立ったままでいる」(← stean「立っている」)

sitten gean「すわる」(← sitte「すわっている」)

oanriden komme「車に乗って来る」(← oanride「車に乗る」)

② 知覚動詞構文：

immen kommen sjen「人が来るのを見る」(← komme「来る」)

immen sjongen hearre「人が歌うのを聞く」(← sjonge「歌う」)

③ 動作名詞：

*Skriuwen* is dreech wurk.「書くのは大変な仕事だ」(← skriuwe「書く」) (Tiersma 1985：77)

It *skriuwen* fan it boek hat lang duorre.「その本を書くのは長い時間がかかった」(ib. 77)

一方，te とともに用いられるのは，オランダ語やドイツ語で見られるような上記以外のさまざまな「{ド．zu/オ．te}＋不定詞句」の用法である。

歴史的に見れば，不定詞は形態的にも動詞の名詞的用法だった。動名詞は元来，不定詞が名詞の格変化による語尾 -n を伴ったいわゆる「屈折不定詞」である。形態的にかつては名詞と同等だった動名詞を伴う te がかつては前置詞だったことに異論はない。それはかつてのオランダ語やドイツ語でも同様である。しかし，現代西フリジア語では，オランダ語の「te＋不定詞」の te やドイツ語の「zu＋不定詞」の zu が前置詞でないのと同様に，「te＋動名詞」の te はもはや前置詞ではない。

前置詞としての te は

Fryske Akademy te Ljouwert「リャウエト（オ．Leeuwarden レーワルデン）のフリスケ・アカデミー」

te wrâld komme「世に出る」　te keap「売り物の」

のような文語的な場所・方向の表現やイディオムで用いられ，今日では生産的ではなくなっている。

次の箇所には動名詞とふつうの名詞との混同が見られる。

(引用：)「不定詞の名詞的用法（動詞の語尾に -n を付す）は全て中性名詞として扱い，通例，it を冠する：

it iten「食べ物」(<ite「食べる」)

it libben「生命，生活」(<libje「生活する」)

It iten smakket my goed.「その食べ物はおいしい」

Hoe stiet it libben?「如何ですか，こんにちは」　(以上 132 ページ)

上記の 'it iten', 'it libben' は「不定詞の名詞用法（動詞の語尾に -n を付す)」，すなわち動名詞ではなく，たんなる中性名詞にすぎない。'it libben「生命，生活」' については，動詞 libje「生活する」(→ it libjen) と語形的にもはっきり異なっている。'it iten' は「食べるということ，食事」という動作名詞としての意味ならば，動詞 ite「食べる」の名詞的用法（すなわち，動名詞）といえるが，「食べ物」という意味の上記の 2 つの例は明らかにそうではない。

**31) 後置詞**

前置詞に関連して，西フリジア語には多数の後置詞がある。

In aap klimt *de beam yn*.「猿が木に登る」

この文の yn「..の中に」は副詞ではなく，後置詞であり，'de beam yn' は後置詞句である。それは次の文で 'de beam yn' が全域（ド．Vorfeld）を占めるひとつの文成分としてはたらいていることからわかる。

*De beam yn* klimt in aap.「木に猿が登る」

後置詞は語形的に対応する前置詞と比較した場合，一定の決まった場所での動作ではなく，動作の方向を表わす。また，対応する前置詞が方向を表わす場合には，動作の完了というアスペクト（西フ．aspekt）にかんする意味をよりはっきりと示すはたらきがある。

① In aap klimt [*yn 'e beam*]. (yn：前置詞)
(「猿が（地面などから）木に登る」)/「猿が木（の中）を登っていく」

② In aap klimt [*de beam yn*]. (yn：後置詞)
「猿が（地面などから）木に登る」

前置詞を用いた①の文は「(地面などから）木に登る」という動作の方向を

示すことも可能だが，「木（の中）を登っていく」という一定の場所での動作を表わす解釈がふつうである。それにたいして，後置詞を用いた②の文はふつう「(地面などから）木に登る」という解釈になる。それは次の対比からも明らかである。

③ In aap klimt fierder [*yn 'e beam*]. (yn：前置詞)「猿が木の中をさらに登っていく」

④ ?In aap klimt fierder [*de beam yn*]. (yn：後置詞)「同上」

オランダ語でも同様に後置詞が発達している。たとえば，①と②に対応する表現は次のようになる。

オ．In aap klimt [in de boom]. (in：前置詞)「同上」

In aap klimt [de boom in]. (in：後置詞)「同上」

ドイツ語にも後置詞はあるものの，in などの基本的な語を上記のような表現で用いることはない。ドイツ語では場所と方向の区別は格支配（与格：場所，対格：方向）によっても表わされる。

本書に後置詞にかんする記述がないのは残念である。あるいはこれを伝統文法に従って副詞ととらえたとしても，それにかんする記述は見あたらない。

しいて類似した現象の記述を挙げれば，次の箇所がそれにあたる。

（引用：）

De baarch woe net nei hûs ta gean.「その豚は家に帰りたがらなかった」

上記の nei hûs ta のように名詞の後に副詞を伴う表現が見られる。これはフリジア語の特徴の１つである。(英語の with a hat on（帽子を被って）と比較せよ）　　（以上 194 ページ）

上記の表現形式はオランダ語にもあるが，西フリジア語のほうが頻繁に見られるので，「フリジア語の特徴の１つ」〈筆者注：「西フリジア語の特徴の１つ」〉といえよう（ただし，「英語の with a hat on」とはかなり構造が違うように思われる)。

筆者は 'nei hûs ta'「家へ」のような表現を $[[\text{nei hûs}]_{pp}\ \text{ta}]_{pp}$ のように分

析し，ta を［nei hûs］という前置詞句を支配する後置詞とみなす立場をとる。

① Ik ryd moarn [[*nei Grins*] *ta*].「私は明日フローニンゲン（オ. Groningen）へ行く」

② [[*Nei Grins*] *ta*] ryd ik moarn.「フローニンゲンへ私は明日行く」

③ [*Nei Grins*]$_i$ ryd ik moarn [$\phi_i$ *ta*].「同上」

②の文は 'nei Grins ta'「フローニンゲンへ」がひとつの文成分（構成素）であることを示している。また，③の文は前置詞句 'nei Grins' が後置詞 ta から離れて前域へ移動していることを示している。

西フリジア語の前置詞句を支配する後置詞には，前置詞の示す方向の意味を強めたり，前置詞の示す場所の意味に動作の方向を示したり，特定化したりするはたらきがある。

④ Ik ryd moarn [nei Grins].「私は明日フローニンゲンへ行く」

④を①と比較すると，④では「フローニンゲンの方角に向かう」という動作の過程（未完了）を表現するニュアンスが強いのにたいして，①では「フローニンゲンへ到着する」という動作の達成（完了）まで含むニュアンスが強いという違いがある。

このように，西フリジア語の後置詞には名詞句を支配するものと，前置詞句を支配するものがある。それと同様に，前置詞にも名詞句を支配するものと，前置詞句を支配するものがある。次の文の achter「...の後ろに，裏側に」は後者の例である。

[*Achter* [*op alle foto's*]$_{pp}$]$_{pp}$ hat beppe de bertedata fan har oerbeppesizzers skreaun.「すべての写真の裏側に祖母はひ孫の誕生日の日付を書きこんだ」(ULI'S, B 11：6 変更)

ただし，後置詞句を支配する後置詞は存在しない。

本書には前置詞句を支配する前置詞についての記述がない。

**32）不定詞語尾 -je，-e**

（引用：）「動詞を造る接尾辞：通例，名詞を動詞に転換させる。

-je：hoopje「希望する」，fyskje「魚を釣る」〈筆者注：fiskje の誤植〉，tankje「感謝する」，winskje「望む」，belje「ベルを鳴らす，電話をかける」...

-e：fange「捕らえる」，helpe「助ける」，lûke「引っ張る」，melke「牛乳を絞る」，sliepe「眠る」　（以上 241-242 ページ）

上記の -je と -e は動詞の語幹に添えられた不定詞をつくる語尾（ド．-en，オ．-en）であり，「名詞を動詞に転換させる」「接尾辞」ではない。次の接尾辞はそのような接尾辞の例であり，-e や -je とは異なる。

-earje：kontrolearje「制御する」，memorearje「記憶する」，studearje「勉強する」（242 ページ）

正確に言えば，接尾辞に相当するのは -ear- であり，後続する -je は上記の不定詞をつくる語尾 -je にあたる（オ．-er(en)，ド．-ier(en)）。

## Ⅵ．補足

次に，明らかな誤植を除いて，小さな誤りをまとめておく。

金銭の単位 sint「セント（百分の一ギルダー）」（77 ページ）は「単数形にのみ用いられる語」（76 ページ）とされているが，じっさいには複数形でも用いられる。

twa {sinten/*sint}「2 セント」

77 ページの次の用例は見落とされているようである。

It kostet fyftich sinten it ûns.「それは 1 オンス 50 セントする」〈筆者注：「... 1 オンスにつき 50 セント...」の意〉（77 ページ）

in pear ynljochtingen「1 つの情報」（78 ページ）

'in pear'（オ．een paar，ド．ein paar）は「1 つの」ではなく，「いくつかの」という意味であり，ynljochtingen「情報」は ynljochting の複数形で

ある。

smeitsje「味わう」(137ページ) は「再帰動詞」(同上) にはなり得ない。意味的にも「...という味がする」の意味が一般的である (オ. smaken, ド. schmecken 参照)

It brief wurdt troch my skreaun.「その手紙は私が書いた」〈筆者注:「...私が書く」が正しい。ただし, 原文は受動態なので,「...私によって書かれる」が適切〉(164ページ)

Dan giet er nei syn frou te teedrinken.「それから彼は妻のところにお茶を飲みに行った」〈筆者注:「...お茶を飲みに行く」が正しい〉(182ページ)

Hy jout de roazen oan har.「彼はそのバラを彼女にあげた」〈筆者注:「...あげる」が正しい〉(198ページ)

上記の文の定動詞 wurdt (...skreaun)「(書か) れる」(← (skreaun) wurde), giet「行く」(← gean), jout「あげる」(← jaan) は現在形だが, 訳文では過去形になっている。

逆に, 次の文の定動詞 seagen「見ていた」(← sjen), lei (...sêft)「(フワフワして) いた」(←(sêft) lizze) は過去形だが, 訳文では現在形になっている。

Twa bern seagen him benijd oan.「2人の子供たちは彼をしげしげと見ている」〈筆者注:「...見ていた」が正しい〉(88ページ)

It bêd lei sa sêft as snie.「そのベッドは雪みたいにフワフワしている」〈筆者注:「...フワフワしていた」が正しい〉(203ページ)

次の文は肯定文だが, 訳文は否定文になっている。

Wy koene(n) it skip dúdlik omfallen sjen.「その船が転覆しているのがはっきり見えなかった」〈筆者注:「...私たちにははっきり見えた」が正しい〉(167ページ)

(引用：)〈受動文の具体例〉...

Hy is it wis wurden.「彼はそれに気づいている」　(以上 170 ページ)

これは「受動文の具体例」ではなく，wurde「...になる」の能動態現在完了形の具体例である。訳文としても「彼はそれに気づいた」とするか，あるいはより正確に「彼はそれを確信した」とするべきである。

(引用：)「従属接続詞の om't, omdat『...だから』〈筆者注：オ. omdat, ド. weil〉の場合は，〈V＋S〉の語順になることに注意」(207 ページ)

「〈V＋S〉の語順になる」のではなく，「〈S...V (文末)〉の語順になる」が正しい。

Doe stie se foar de doar.「それから彼は玄関の前に立った」〈筆者注：「それから彼女は...」が正しい〉(188 ページ)

この文の主語 se「彼女は」は女性形だが，訳文では男性形「彼は」になっている。

逆に，次の文の主語 er「彼が」は男性形だが，訳文では女性形「彼女が」になっている。

Wylst er it sei, kamen se der al oan.「彼女がそう言っているところに，彼らはもうやって来た」〈筆者注：「彼がそう言っているところに...」が正しい〉(210 ページ)

Hja rûn en rûn deis.「彼らは毎日歩き続けた」〈筆者注：「彼女は」が正しい〉(216 ページ)

この文の主語は単数女性形 hja「彼女は」だが，訳文では複数男性形「彼らは」になっている。また，この文で 'rûn en rûn'「歩き続けた」という表現を用いるのは，西フリジア語の語感として不自然である。

(引用：)

動詞句の構造 (2) 従属文の場合：……

主文　　従属文

$$S+V+\boxed{\text{接続詞}}+S+\ldots\ \begin{matrix} V \\ V \\ V+v^1+v^2+\ldots \end{matrix}$$

＊ 接続詞が関係代名詞の場合，その前に先行詞がある。

(以上 223 ページ)

Dit is it horloazje dat myn omke my fiif jier lyn joech.「これは叔父さんが 5 年前に私にくれた時計だ」(同上)

Dit is de man dy't my op 'e mar holp.「これは私を湖で助けてくれた人です」(同上)

上記の 2 つの文の注には次のように述べられている。

(引用：)「このように，接続詞が関係代名詞の場合は，S〈筆者注：主語〉は関係代名詞の先行詞の位置に移動する」(同上)

「S〈筆者注：主語〉は関係代名詞の先行詞の位置に移動する」というのは，いかなる「移動」を指すのか理解に苦しむ。じじつ，上記の文の 'it horloazje'「時計」は従属文の主語ではなく，直接目的語である。

Mem frege oft ik dit wurk tsjin seis oere dien ha koe.「私が 6 時前にこの仕事がすっかり片づくか母に尋ねた」〈筆者注：「…母は尋ねた」が正しい〉(224 ページ)

この文の mem「母は」は主語だが，訳文では目的語「母に」になっている。

As er it dien hat, sil er it sizze.「もし私がそれをしていたら，彼がそう言うでしょう」〈筆者注：「もし彼が…」が正しい〉(228 ページ)

この文の従属文の主語は er「彼が」だが，訳文では「私が」となっている。

'En twang, fan wa ek, stie it tsjin.'〈筆者注：「そして，束縛にたいしては，だれからであろうと，それ（＝フリースラント）は抵抗した」の意味〉（*Frysk folksliet*, E. Halbertsma）（255ページ）。

この部分の注には「twang（副）『威風堂々として』」（同上）とあるが，twang は「束縛，強制」という意味の名詞である。

'Troch seeën skaat en lânen／Fier oan 't Westerstrân.／Tink ik mei sucht en triennen／Oan dy, myn Heitelân!'〈筆者注：「幾多の海と陸に阻まれ／遠く西方の海岸にあって／私はため息と涙に暮れて／祖国よ，おまえのことを思っている」の意味〉（256ページ）（*It âlderhûs*「懐かしきわが故郷」，P. J. Troelstra）（258ページ）。

この部分の注には「dy『これ』故郷のこと」（258ページ）とあり，この文をもとにしたと思われる202ページの例文には次のような訳文が付されている。

Ik tink mei sucht en triennen oan dy, myn heitelân.「私は溜め息と涙でこの祖国のことを考えている」（202ページ）

しかし，dy は指示代名詞（dy [di]「それ，あれ」）ではなく，人称代名詞2人称親称単数主格 do「君，おまえ」の目的格 dy [dɛi, di] である。したがって，'Tink ik.../Oan dy, myn Heitelân!' と 'Ik tink...oan dy, myn heitelân' の部分は，それぞれ「祖国よ，私は...これを考えている」，「私は...この祖国のことを考えている」という意味ではなく，「祖国よ，私はおまえのことを考えている」という意味である。

by-（234ページ），ta-（237ページ）は234ページの説明とは異なって，「分離動詞の前綴りとしても用いられる」。例：

bybringe「前に持って来る」〈筆者注：「教える，思い出す」の意味もある〉（同上）

talaitsje「見て微笑む」〈筆者注：「（人に）微笑みかける」〉（同上）

次のドイツ語の接頭辞および接尾辞は誤植である。

ド．in-「中に」〈筆者注：ein- が正しい〉(235 ページ)

ド．met-「また，共に」〈筆者注：mit- が正しい〉(236 ページ)

ド．miss-「悪い，誤った」〈筆者注：miß- が正しい〉(同上)

ド．uber-「越えて」〈筆者注：über- が正しい〉(同上)

ド．zuruk-「後に」〈筆者注：zurück- が正しい〉(237 ページ)

ド．-ster 同じく「女性」の語尾。〈筆者注：対応する語形なし〉(238 ページ)

ド．-loos「欠如，不可能」〈筆者注：-los が正しい〉(241 ページ)

ド．-ich 名詞につけて，「...がある」などの意味を表わす。〈筆者注：-ig が正しい〉(同上)

他の誤植の指摘は割愛する。

(引用：)「名詞的複合語：...なお，アクセントは，通例，最後の第 1 要素に置かれる」(243 ページ)

複合語のアクセントは通例，「最初の」第 1 要素に置かれる。

個々の語彙にかんするものを以下にまとめておく。

nei「...の後で，...の方向へ」は「決して...ない」(44 ページ) という意味ではない。

fysiology「生理学」は「物理学」(49，270 ページ) という意味ではない。

neifertelle「(読んだり聞いたりした話を) 自分の言葉で語り直す」は「繰り返す」(50，280 ページ」とは意味的にずれがある。

learsum「ためになる」は「教えやすい」(59 ページ)，「教え易い」(277 ページ) という意味ではない。

waarden は wurde「...になる」の「過去分詞」(61 ページ) ではなく，過去複数形である。

'It Nederlân'「オランダ」(68 ページ)，'It Ingelân'「イギリス」(同左) の定冠詞 It (オ．Het，ド．Das) は削除する必要がある。

list，lyst「額縁」は「目録」(84 ページ) という意味ではない。「目録」

という意味にはlistだけが対応する。オランダ語ではlijst「額縁」，list「目録，リスト」のように区別する。また，縮小形listke/lystkeの発音は［t］の脱落（清水 1995：65-72）を伴うので，［lístkə］（84ページ）ではなく，［lískə］が正しい。

folksaardich「国民的な，民族的な」は「特別な」（122ページ），「特別の，特徴ある」（271ページ）という意味ではない。

'jin abonnearje (op)'「(..を）定期購読する」は「に耽る」（173ページ），「に耽ける」（263ページ）という意味ではない。

'jin blamearje'「恥をかく」は「妥協する」（173ページ）という意味ではない。

'jin dearinne'「必死に歩く（走る）」は「パッタリ止まる」（174ページ），「パッタリと止まる」（266ページ）という意味にはならない。「行きどまりである，それ以上進まない」という意味には再帰動詞'jin dearinne'ではなく，自動詞dearinneを用いる。次の用例を参照。

Ik haw *my dearûn* om de trein noch te heljen.「列車になんとか間に合うように私は必死に走った」（← jin dearinne）（Zantema 1984：160）

De feart *rint* yn 't doarp *dea*.「その運河は村の中で行きどまりになっている」（← dearinne）（ib. 160）

Se wol my tige graach sjen.「彼女は私にとても会いたがっている」は「彼女は私に会ってとても喜んでいる」（178ページ）という意味にはならない。

It heucht my.「〈筆者注：私は〉覚えています」

この文の注には'jin heuge「覚えている」'（同上）とあるが，'It heucht my'のheuchtは再帰動詞ではないので，'immen heuge'とする必要がある：

西フ．jin ～ オ．zich，ド．sich

⇔西フ．immen ～ オ．iemand，ド．jemand

belibje「体験する」は「証拠となる」（182ページ）という意味ではない。

aansen「すぐに，まもなく」は「直接に」（187ページ）という意味ではなく，aanstons「すぐに，まもなく」（aansenと同義）は「後で」（263

ページ）という意味ではない。

aardich「人当たりのいい，好ましい」は「急いで」(263 ページ）という意味ではない。

âlderjûn「父母会の夕べ」は「父母会」(263 ページ）では不十分である。

appel「リンゴ」(264 ページ）は「中性名詞」(同左）ではない。ただし，appél「呼びかけ，点呼」は中性名詞である。

bedraaie「帆を使って航路を変える，白状する」は「寄付［貢献］する」(263 ページ）という意味ではない。「寄付（貢献）する」という意味には bydrage を用いる。

ferstaan「負かす」(269 ページ）は西フリジア語ではない。なお，ferstean（オ．verstaan）は「聞こえる，（聞いて）理解する，こらえる」という意味である。

「ferwundert（3・単・過）<ferwunderje (jin)（動）(非）に驚く」(270 ページ）は「ferwûndert（3・単・現）<(jin) ferwûnderje（動）(再）(..に）驚く」とする必要がある。ferwundert（同上）は ferwûndert の誤植であり，「過去形」ではなく現在形であり，「非人称動詞（非)」ではなく他動詞の再帰的用法である。

foarsitter「議長，委員長，会長」は「司会者」(270 ページ）では不十分である。

handich「手軽な，便利な」は「急いで」(273 ページ）という意味ではない。

keunst「芸術，技」は「精神」(276 ページ）という意味ではない。

konvint「集会，修道院」は「慣習」(277 ページ）という意味ではない。「慣習」に対応するのは konvinsje である。

leberlij（名）「噂」(277 ページ）は leberij の誤植と思われるが，意味としては「悪口」がふさわしい。

licht（形）「軽い；低い」(278 ページ）の「低い」は値段の場合に限られる：in lichte priis「安値，低い値段」。物理的な意味で「低い」には leech を用いる。

ljochtsje「照らす，明るくする」は「持ち上げる」(278ページ) という意味ではない。

meimeitsje「経験する」は「目撃する」(279ページ) という意味ではない。

neier「より近い，よりくわしい」は「後で」(280ページ) という意味ではない。

ôfgryslik「恐ろしい」は「恐らく，とても」(281ページ) という意味ではない。

ornearje「定める」は「意図されている」(282ページ) という意味ではない。

plant「植物」には「厳しい教育」(283ページ) という意味はない。

sinningje (動)「喜ばせる」(285ページ) はsinnigjeの誤植と思われるが，意味としては「...の気持ちに合う」がふさわしい。

slachには「(軽い) 散歩，一巡り」(286ページ) という意味もたしかにあるが，「なぐること，打つこと」という意味がもっともふつうである (オ. slag，ド. Schlag)。

slûpe「こっそり歩く，滑る」は「うろうろする」(同上) という意味ではない。

smoke「タバコをすう」は「燻す」(同上) という意味ではない。

stekke「刺す，突く」は「(引き) 離す」(287ページ) という意味ではない。

stjonke「悪臭がする」は「刺す」(同上) という意味ではない。

strike「撫でる，アイロンをかける」には「打つ」(同上) という意味はない。「打つ」という意味にはslaanを用いる。

struie「ふりまく」には「アイロンをかける」(同上) という意味はない。上記のstrike参照。

taalnoarm「言語規範」は「標準語」(288ページ) という意味ではない。

tichtbine「(ひもなどを) 結ぶ」は「固くなる」(同上) という意味ではない。

trochdat「(...ということ) を通じて，(...ということ) によって」は「...というのは，だから」(289ページ) という意味ではない。

wannear「いつ」には「いつでも，どんな時でも」(290ページ) という意味はない。

(jin) warje「(自分の) 身を守る」は「見張る」(290ページ) という意味ではない。

wêr(e)「どこ」には「再び」(291ページ) という意味はない。wer「再び」参照。

「参考文献」(260ページ以下) について。

(引用：)「われわれが，現在使用できる西フリジア語の辞書は，フリジア語＝オランダ語，オランダ語＝フリジア語のみである」(260ページ)

このほかにも，すでに1968年に下記のデンマーク語との対訳辞書が出版されている。

V. T. Jørgensen/T. Hoekema 1968. *Frisisk—dansk ordbog/Deensk Frysk wurdboek*. Groningen. Wolters-Noordhoff.

また，小辞典ながら，1986年には英語との対訳辞書も出ている。

Fisher, Raymond John. 1986. *Frisian—English Dictionary*. Colorado. Johnston Printers. (viii, Frisian—English p.1-116, English-Frisian p. 117-215)

*It Beaken* は *Us Wurk* と「ほぼ同じトピックを扱っている」(262ページ) のではなく，フリジア語学文学に限らず，フリースラントにかんする広い学問領域を対象とする学術雑誌である。

*Philologia Frisica* は残念ながら「年2回発行」(同上) されてはおらず，3年に1度しか出ていない。

## Ⅶ. おわりに

以上，日本語によるはじめての西フリジア語の文法書である本書の内容をもとに，同言語の文法記述の問題点にかんするトピックをいくつか拾いなが

ら論じてみた。

本書には西フリジア語の構造について上述のような不備な記述がある。その多くは同言語の基本的な特徴にかかわるものだけに残念である。

西フリジア語あるいはフリジア語一般にかんするまとまった著作は，フリジア語やオランダ語によるものは別として，筆者の知る限り，ドイツ語，英語，デンマーク語，フランス語，イタリア語，ロシア語で書かれたものしか存在せず，すべてヨーロッパで刊行されている。

およそパイオニア的な業績には限界があるのは言うまでもない。西フリジア語の構造を的確に説明した第2の文法書の刊行が望まれる。

**注**

筆者の目に触れた J. W. Zantema (útj.). 1984. *Frysk Wurdboek 1. Frysk—Nederlânsk* の誤植のいくつかを以下に示しておく。

blz. 107　'bite ... (誤) [bitət]→ (正) [bitə]

blz. 182　doanje'neel ... (誤) [dua$^{n}$jəne:l]→ (正) [dva$^{n}$jəne:l] から blz. 183　'doaze ... doaske (誤) [duaskə]→ (正) [dvaskə] までの 14 箇所 (16 ページの説明参照)

blz. 208　dwaan ... (誤) [dwa:n]→ (正) [dva:n]

blz. 224　e'noarm ... (誤) [ənuarm]→ (正) [e.nuarm]

blz. 271　fêst ... (誤) -er → (正) -er，meast fêst (Hoekema 1992：2，最上級の記載漏れ)

blz. 280　fysiolo'gy ... (誤) [fizio:lo:gi]→ (正) [fiziologi]

blz. 284　'fjouwer ... (誤) [fjo.uər]→ (正) [fjɔ.uər]

blz. 324　gean ... giest (誤) [gI.əst]→ (正) [gi.əst]

blz. 359　grut ... grutst (誤) [γröt] [γgö:st]→ (正) [gröt] [grö:st]

blz. 479　ka'talogus ... (誤) -logi → (正) -logy

blz. 514　koai ... (誤) [kua:i]→ (正) [kva:i] から blz. 518 'koazze ... (誤) [kuazə]→ (正) [kvazə] までの 43 箇所

(16 ページの説明参照)

blz. 539 'kristlik ... (誤) [krIsllək]→ (正) [krIs(t)lək]

blz. 637 mûs ... mûzen (誤) [mûzən]→ (正) [mu:zən]

blz. 782 prin'ses(se) ... (誤) [pre:$^{n}$sɛs(ə)]→ (正) [prI$^{n}$sɛs(ə)]

blz. 803 'reedner ... (誤) [re:dnəs]→ (正) [re:dnər]

blz. 811 reus ... (誤) [ro:s] → (正) [rö:s]

blz. 984 'stjerre ... (誤) stoat → (正) stoar

blz. 1172 'wenje ... (誤) [ve$^{n}$jə]→ (正) [vɛ$^{n}$jə]

blz. 1156 I wâld ... (誤) [wɔ:t]→ (正) [vɔ:t]

blz. 1156 'wakker, (誤) afj. → (正) adj.

blz. 1209 wurd ... (誤) [wöt]→ (正) [vöt]

**参考文献**

Boersma, J./G. van der Woude. 1981². *Spraaklear* I. Ljouwert. AFUK.

De Haan, Germen J. 1983. "The position of the finite verb in Modern West Frisian". in: N. Danielsen e. a. (eds.). *Friserstudier* III. Odense. Odense University Press. 37-48.

De Haan, Germen J. 1994. "Inflection and cliticization in Frisian *-sto*, *-ste*, *-st*". *NOWELE* 23. 75-90.

Dyk, Siebren. 1992. "Warum gibt es im westerlauwersschen und Föhrer Friesisch eine Nomeninkorporation?". in: Volkert Valtings/Alastair G. H. Walker/Ommo Wilts (Hrsg.). *Friesische Studien* I. Odense. Odense University Press. 143-169.

Dyk, Siebren/Jarich Hoekstra. (útj.). 1987. *Ta de Fryske syntaksis*. Ljouwert. Fryske Akademy.

Dykstra, Anne. 1985. "Besprek : *Pieter Meijes Tiersma, Frisian Reference Grammar*". *Tydskrift foar Fryske Taalkunde* 1. 90-98.

Hoekema, Teake. 1992. *Kurze Formenlehre des Westerlauwersk Frysk-aus dem Dänischen übersetzt von Claas Riecken*. Kiel. Nordfriesische

Wörterbuchstelle der CAU Kiel.

Hoekstra, Jarich. 1994. "Pronouns and Case. On the distribution of Frisian *harren* and *se* 'them'". *Leuvense Bijdragen* 83. 47-65.

Hoekstra, Jarich. 1995. "Preposition stranding and resumptivity in West Germanic". in : Hubert Haider/Susan Olsen/Sten Vikner (eds.). *Studies in Comparative Germanic Syntax*. Dordrecht/Boston/London. Kluwer. 95-118.

Hofmann, Dietrich. 1961. *Die k-Diminutiva im Nordfriesischen und in verwandten Sprachen*. Köln/Graz.

Meijering, H. D. 1980. "d(e)-deletion in the past tense of the class II weak verb in Old Frisian". in: D. J. van Alkemade e. a. *Linguistic studies offered to Berthe Siertsema*. Amsterdam. Rodopi. 277-286.

清水　誠. 1992.「北フリジア語モーリング方言 (1). 文法. -V. Tams Jørgensen. "Kort spräkeliir foon dåt mooringer frasch" 訳注ー」. 北海道大学文学部紀要 40-3. 65-162.

Shimizu, Makoto, 1993. "Naar aanleiding van Hitoshi Kodama, *Fryske grammatika*". *Us Wurk—Tydskrift foar frisistyk*. 42. 103-114.

清水　誠. 1995 a.「西フリジア語の音韻と正書法 (1)」. 北海道大学文学部紀要 44-1. 37-81.

清水　誠. 1995 b.「西フリジア語の音韻と正書法 (2)」. 北海道大学文学部紀要 44-2. 43-111.

Stienstra, J. 1982. *Taalboek foar begjinners*. Ljouwert. AFUK.

Tiersma, Pieter Meijes. 1985. *Frisian Reference Grammar*. Dordrecht/Cinnaminson. Foris.

*ULI'S*, rige A 1-20, rige B 1-20, rige C 1-20. 1978-1984. Ljouwert. AFUK.

Van Haeringen, C. B. 1939. "Congruerende voegwoorden". *Tijdschrift voor Nederlandse Taal- en Letterkunde*. L XIII 215 vlgg. (Nederlandica. 1949. 's-Gravenhage. D. A. Daamen's Uitgevermaatschappij N. V. 246-259. 再録)

Visser, Willem. 1988a. "Werom't progressive assimilaasje yn it Frysk net bestiet". *Tydskrift foar Fryske taalkunde*. 4. 1-20.

Visser, Willem. 1988b. "In pear klitisearringsferskynsels yn it Frysk". Yn: Siebren Dyk/Jarich Hoekstra (útj.). *Wurdfoarried en wurdgrammatika: in bondel leksikale stûdzjes*. Ljouwert. Fryske Akademy. 175-222.

Werner, Otmar. 1993. "Schwache Verben ohne Dental-Suffix im Friesischen, Färöischen und im Nynorsk". in: J. Schmidt-Radefeldt & A. Harder (Hrsg.). *Sprachwandel und Sprachgeschichte. Festschrift für Helmut Lüdtke zum 65. Geburtstag*. Tübingen. Narr. 221-237.

Zantema, J. W. 1984. *Frysk Wurdboek 1. Frysk—Nederlânsk*. Drachten/Ljouwert. A. J. Osinga Uitgeverij/Fryske Akademy.

＊本稿は平成７年度文部省科学研究費補助金による研究成果の一部である。研究課題：「大陸部北海沿岸の西ゲルマン語相互の言語接触と類型論的特徴の変化」．奨励研究（A）．課題番号 07710346.